

伊勢国府跡 23

2021年3月

鈴鹿市

例言

- 1 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が令和2年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち、伊勢国府跡（長者屋敷遺跡第40次）調査の概要をまとめたものである。
- 2 発掘調査は以下の体制で実施した。
 - 調査主体 鈴鹿市 市長 末松則子
 - 調査指導 石田由紀子（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員）
小澤 毅（三重大学人文学部教授）
金田章裕（京都大学名誉教授）
和田勝彦（財団法人文化財虫菌害研究所常務理事）
渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）
文化庁文化財部文化財第二課 三重県教育委員会事務局社会教育・文化財保護課
三重県埋蔵文化財センター
 - 調査担当 鈴鹿市文化スポーツ部文化財課
文化財課長 野呂和伸
副参事兼発掘調査グループリーダー 常山隆宏
発掘調査グループ 主幹 藤原秀樹
副主幹 田部剛士
事務職員 前田有紀
- 3 発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。
 - 鈴鹿市広瀬町字長塚 1248 番 1〔6AFF-B 区〕 面積 399.04㎡
 - 字長塚 1249 番〔6AFG-A 区〕 面積 11.69㎡
 - 字荒子 1030 番〔6AIA-F 区〕 面積 171.15㎡調査期間 令和2年8月31日～令和2年11月19日
- 4 現地調査は藤原が担当した。本書の執筆・編集は藤原が担当した。
- 5 調査参加者は以下のとおりである。
 - 〔現地調査〕 伊藤和代・加藤忠昭・越山 武・木村芳雄・酒井新治
橋本 守・前川義輝・町野計司・吉岡健次（三重県シルバー人材センター連合会）
雨森遥香・堀田大生（三重大学人文学部）
 - 〔屋内整理〕 加藤利恵・永戸久美子・前出みさ子・村木 泉（文化財課臨時職員）
- 6 Fig.2 では国土地理院 20 万分の 1 地勢図「名古屋」の一部を、Fig.1 では国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」・「亀山」の一部を加工して使用した。
- 7 座標は過去の調査との整合性を保つため、日本測地系第Ⅵ系を用いている。なお、図中の方位は座標北を示す。
- 8 本調査に係る図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。
- 9 調査及び報告書刊行にあたっては上記調査指導の個人・団体の他に、地元各位をはじめ、下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）
亀山市生活文化部文化スポーツ課まちなみ文化財グループ・谷川元治・株式会社モリファーム・森 和彦・青川畜産・青川武義・田中操・広瀬 町自治会・鈴鹿市シルバー人材センター

目次

例言	i	(2) 6AFF-B 区	5
目次	ii	(3) 6AIA-F 区	7
I 遺跡の位置とこれまでの調査成果	1	(4) 6AFG-A 区	8
II 調査の経過	3	(5) 出土遺物	8
III 発掘調査		IV まとめ	9
1 調査の目的と方法	4	参考文献	11
2 調査の成果			
(1) 基本層序	5		

表目次

Tab.1 調査履歴	2	Tab.3 報告書抄録	34
Tab.2 北方官衙（方格街区）で確認された建物一覧	23		

図版目次

Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡	12	Fig.9 6AIA-F 区・6AFG-A 区遺構配置図	18
Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な寺院・官衙関連遺跡	12	Fig.10 6AIA-F 区サブトレンチ断面図	19
Fig.3 調査区位置図	13	Fig.11 長塚南東区遺構配置図	20
Fig.4 6AFF-B-1 区・6AFF-B-2 区北半遺構配置図	14	Fig.12 土器実測図	21
Fig.5 6AFF-B-2 区南半・6AFF-B-3 区遺構配置図	15	Fig.13 軒丸瓦実測図	21
Fig.6 6AFF-B-2 区・6AFF-B-3 区サブトレンチ断面図	16	Fig.14 平瓦実測図	22
Fig.7 6AFF-B-1 区サブトレンチ断面図	17	Fig.15 丸瓦実測図	23
Fig.8 6AFG-A 区サブトレンチ断面図	17	Fig.16 北方官衙（方格街区）で確認された建物	23

写真図版目次

Plate 1 調査地全景 / 6AFF-B 区全景	24	Plate 6 SD363 サブトレンチ 8 断面	
Plate 2 6AIA-F・6AFG-A 区全景 / 6AFF-B-1 区全景	25	SD363 サブトレンチ 9 断面	
Plate 3 SA371・SD363		SK (SD) 364 サブトレンチ 10 断面	
SB002 外周溝と重複する SD363		SK374・攪乱土坑サブトレンチ 14 断面	
SB002 北西隅：掘込地業 a-c・SD363・SD365		6AFG-A 区全景 / SD374	
SB002 北東隅：掘込地業 c・SD366・SD367		SX (SB) 375 地業サブトレンチ 26 断面	
SB002 南東隅：掘込地業 e・SD366		SD374 サブトレンチ 26 断面	29
SB002 南東隅：掘込地業 e・SD366		Plate 7 6AIA-F 区遺構検出作業 / 6AIAF 区全景	
SB002 掘込地業 a-c・SD365		SA372 基底 / SA372 基底 / SD361 / SD360	
SB002 掘込地業 a-c・SD363・SD365	26	SD361 サブトレンチ 5 断面	
Plate 4 SB370 全景 / SB370 掘込地業 d		SD361 サブトレンチ 3 断面	30
SB370 掘込地業 d・SD362 / SD362		Plate 8 SD361 サブトレンチ 2 断面	
SD362 / SD362 平瓦出土 / SD366・SD369		SD360 サブトレンチ 1 断面	
SD365 土師器坏・瓦出土	27	SD360 サブトレンチ 1 断面	
Plate 5 掘込地業 d サブトレンチ 20 断面		SD360 サブトレンチ 4 断面	
SD362・掘込地業 d サブトレンチ 17 断面		SD360 サブトレンチ 7 / SD360 サブトレンチ 27	
掘込地業 d サブトレンチ 18 断面		SD360 サブトレンチ 2 断面	
SD366 サブトレンチ 19 断面		SA372 基底部サブトレンチ 2	31
SD366 サブトレンチ 21 断面		Plate 9 土器 / 軒丸瓦	32
SD366 サブトレンチ 15 断面 / SD368・攪乱土坑		Plate 10 平瓦・丸瓦	33
SD368 サブトレンチ 15 断面	28		

I 遺跡の位置とこれまでの調査成果

史跡伊勢国府跡（長者屋敷遺跡：以下、遺跡としては「長者屋敷遺跡」）は鈴鹿川の支流である安楽川の左岸に所在する。一帯は標高約 49m の台地で、鈴鹿山脈の裾野に広がる水沢扇状地の中期面に相当する。台地南面に広がる谷底平野との比高差は約 20m である。

遺跡の北半は鈴鹿市広瀬町に、南半は西富田町に属する。また、遺跡の西半は亀山市能褒野町に及んでいる。当遺跡一帯は鈴鹿市の農業振興地域であり、水田のほか茶・サツキ苗・芝などの商品価値の高い畑が広がるほか、牛舎・豚舎および製茶施設が点在する。

瓦の出土や基壇・土塁状の高まりが各所にみられることから「矢卸長者」の伝説が伝えられ、古くより知られている。遺跡の範囲は南北約 1,300 m × 東西約 700m と広いが、瓦など古代の遺物が散布する範囲は南北約 800m ・東西 600m に限られる（村山 1992）。瓦散布範囲の南端中央で平成 5（1993）年度に国府政庁（以下「国庁」）が確認され、その後国庁の北方で発見された建物群（北方官衙）を合わせた 3 地点合計 73,940㎡が、平成 14（2002）年 3 月 19 日に伊勢国府跡として国の史跡に指定され、平成 29 年 10 月 13 日に北方官衙の一部 1,409㎡が追加指定された。長者屋敷遺跡における国府関連の遺構・遺物の時期は 8 世紀中頃から 9 世紀初頭と狭い範囲に限られる。

鈴鹿川流域には古くから東西交通の要衝として多くの遺跡が残される。古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる。延喜式に知られる伊勢国の鈴鹿・河曲・朝明・榎撫の各駅家を経由して尾張国に至る経路のうち、鈴鹿駅家は鈴鹿関付近に、河曲駅家は伊勢国分寺跡および隣接する河曲郡家（狐塚遺跡）周辺に位置したことは疑いない。古代官道の遺構としては、鈴鹿川右岸の平田遺跡で側溝芯々間が 9 m の道路痕跡が発見されている（林 2005）。この道路遺構は奈良時代後半のものと考えられ（田部 2016）、鈴鹿市国府町と同国分町の伊勢国分寺跡を結ぶ線上に立地する。奈良時代の一時期には亀山市関町古厩（鈴鹿駅家推定地）と伊勢国府推定地を結んで鈴鹿川右岸を通る官道が存在したのであろう。奈良時代中期頃になると、鈴鹿関が鈴鹿川の左岸に整備されるに伴い、官道も鈴鹿川左岸に付け替えられたと考えられ、長者屋敷遺跡の国府の整備もそれに伴うと考えられるが、鈴鹿川左岸の官道の実態は未だ不明である。

長者屋敷遺跡で国府政庁が確認されるまでは、鈴鹿市国府町が、「国府」という地名とともに、伊勢国総社に比定されている三宅神社や府南寺といった由緒ある社寺が残ることなどから、伊勢国府の所在地と考えられてきた。伊勢国府推定地の範囲内においても各所で調査が行

われている。三宅神社遺跡の第 1 次調査では奈良時代前期の大型方形井戸が検出された（新田 1997）。第 2 次調査では整然と配置された平安時代の掘立柱建物群が（藤原 1997）、第 5 次調査では墨書土器や斎串などの祭祀具を伴った井戸や大型の掘立柱建物群などが確認されている（林 2001）。また、天王山西遺跡では施釉陶器を多く伴った掘立柱建物群が検出されている（杉立 2001）。梅田遺跡では平安時代前期の集落と平安時代末期から鎌倉時代にかけての有力者の居宅が調査されている（石田 2001）。また、富士遺跡では鋳造遺構が検出され（田部 2007）、黒色土器が多く出土した（吉田隆 2008）。このように、国府地区には奈良時代前期および奈良時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に分布し、鈴鹿郡家および初期・後期国府が所在した可能性が極めて高いと考えられるが、官衙と決定付けられる遺構は未確認である。

さて、長者屋敷遺跡における発掘調査は昭和 32（1957）年に遡る。歴史地理学的な国府研究の一環として鈴鹿市国府町で調査を行っていた京都大学の藤岡謙二郎らが鈴鹿川・安楽川を挟んだ対岸の長者屋敷遺跡の存在を知り調査を行った。当時、国府町に国府方八町域を想定していた藤岡らは、長者屋敷遺跡が初期の国府である可能性を示唆しながらも、鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した（藤岡ほか 1957）。

鈴鹿市では平成 4（1992）年度から長者屋敷遺跡の学術調査を開始し、平成 5（1993）年度の「矢下」地区における国庁の確認によって伊勢国府跡であるとの評価が定着した（藤原ほか 1995）。国庁の北方においては「南野南」「長塚南西」「中土居南」の各区画（区画の通称は Fig.3 参照）において瓦葺礎石建建物群（以下「北方官衙」）が発見された（新田 1997・1999 ほか）。

また、三重県埋蔵文化財センターによる北西域の緊急調査によって北方官衙に伴う方格地割の存在が明らかとなった（宇河 1996）。調査を担当した宇河雅之は国府国庁域を含む南北 6 区画・東西 5 区画の方格地割を想定し、北端に位置する金藪を平城宮における松林苑に相当すると考えた（宇河 1973）。方格地割はその後の調査で北方官衙域において区画施設が徐々におさえられる一方（吉田真 2004・水橋 2005・小倉 2006）で、国庁以南においては「朱雀路」のみならず地割や官衙らしき遺構は全く確認されなかった（吉田真 2004・水橋 2005）。

平成 25（2013）年度の第 31 次から第 34 次調査において宇河の方格地割案の北西部及び東部の確認調査を行ったが、いずれも区画溝等は確認されなかった。結局、方格地割で確実なものは南北大路を中心に東西 4 区画・南北 3 区画と考えることが妥当とされた（新田 2013・

Tab.1 調査履歴

回数	調査 年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査原因	概要	報告書番号
プレ 1 次	1957	A 地点	広瀬町字南野		-	学術	礎石建物	
		B 地点	広瀬町字矢下		-		基壇	
1 次	1992	長塚 1	広瀬町字長塚 1247,1248	921110 ~ 930129	110	学術	建物・礎敷き遺構	国・長
		南野 1	広瀬町字南野 971		115		建物	
		荒子 1	広瀬町字荒子 981		110		瓦溜・溝	
2 次	1993	6AHI-F、 6AJA-A ほか	広瀬町字仲起 1226・矢下 1134 ほか	931129 ~ 940228	238	学術	政庁後殿・東隅楼・軒廊・東内溝 東外溝・西外溝	国・国
3 次	1994	6AJA-J ほか	広瀬町字矢下 1131 ~ 1133	941006 ~ 941227	750	学術	政庁正殿・西脇殿・西軒廊・西内溝 西外溝	国・国 2
3-2 次	1994	県調査区	広瀬町字中土居、亀山市能褒野町字 中土居	940601 ~ 940817	2,700	県緊急	溝	
4 次	1995	6AJA-A ほか	広瀬町字矢下・荒子・仲起	950920 ~ 951219	254	学術	政庁後殿・北外溝・西内溝・西隅楼	国・国 3
4-2 次	1995	県調査区	広瀬町字中土居、亀山市能褒野町字 中土居	950605 ~ 950713	1,600	県緊急	溝	
5 次	1996		広瀬町字丸内	960620 ~ 960716	133	市緊急	竪穴住居・溝	埋文年報Ⅳ
6 次	1996		広瀬町字矢下	960625 ~ 960719	288	市緊急	溝	
7 次	1996	6AGE-A	広瀬町字南野 972 番・972 番 1 972 番 2・973 番	961007 ~ 970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝	国・国 4
8 次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚 1279 番 2	971016 ~ 980210	632	学術	倒壊瓦・礎石建物・溝	国府跡
9 次	1997	A 地区	広瀬町字矢下	980223 ~ 980320	21	市緊急	政庁南辺部	埋文年報Ⅴ
		B 地区	広瀬町字矢下		26		政庁西脇殿	
		C 地区	広瀬町字仲起		5		溝	
10 次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚 1279 番 3・1279 番 5	980901 ~ 981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑	国府跡
11 次	1999	6AJA-H ほか	広瀬町字矢下 1176 番ほか	990901 ~ 000131	863	学術	溝・礎石建物・南門	国府跡 2
12 次	2000	6AHI-CF ほか	広瀬町字中起・荒子	001001 ~ 010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・竪穴住居・溝	国府跡 3
13 次	2001	6AHD-AB ほか	広瀬町字中起 1237 番・1240 番 1-3・1241 番	010920 ~ 020214	714.2	学術	溝・土坑	国府跡 4
14 次	2001	6AEC-AB	広瀬町字中土居 1282 番 1	020106 ~ 020111	246	市緊急	礎石建物・溝	年報 4
15 次	2002	6AJJ-D ほか	広瀬町字矢下 1154 番ほか	020424 ~ 020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古墳・土墳墓	国府跡 5
16 次	2002	6AJF-B ほか	広瀬町字矢下 西富田町字東起・矢卸	020620 ~ 020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器棺墓 古墳周溝・方形周溝墓	年報 5
17 次	2002	6ADB-A-E	広瀬町字西野 3300 番	020806 ~ 021130	4,640	市緊急	掘立柱建物・溝・竪穴住居	
18-1 次	2003	6AJC-F	広瀬町字矢下 1126 番	030417 ~ 030630	243	学術	溝	国府跡 6
		6AJD-E	広瀬町字矢下 1144 番	030421 ~ 030630	267		溝	
		6ALE-A	西富田町字矢卸 1015 番 17	030528 ~ 030630	21		なし	
		6ALE-B	西富田町字矢卸 1015 番 17	030528 ~ 030630	11		なし	
		6ALC-G	西富田町字矢卸 1015 番 15・16	030528 ~ 030630	48		なし	
18-2 次	2003	6AEA-A	広瀬町字中土居 1283 番 2	030902 ~	360		溝・土坑	
19 次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内 2609 番 1	040831 ~ 041118	220	学術	溝	国府跡 7
		6AFA-A	広瀬町字中土居 1290 番 1	040913 ~ 041118	200		なし	
		6ABB-A	広瀬町字長塚 1275 番	040928 ~ 041118	550		竪穴住居	
20 次	2005	6AAD-B	広瀬町字丸内 2606 番 1・2607 番 1・2608 番 1	050822 ~ 051130	200	学術	溝	国府跡 8
		6AGF-A	広瀬町南野 945-6	051011 ~ 051130	140		溝	
21 次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野 3242	060719 ~ 060908	500	学術	溝・土坑	国府跡 9
22 次	2007	6ADC-A	広瀬町字西野 3311	071001 ~ 071206	326	学術	風倒木・ビット	国府跡 10
23 次	2007	—	亀山市	—	—	亀山市緊急	溝	
24 次	2008	6AEB-C	広瀬町字中土居 1282 番 2	080616 ~ 080717	835	市緊急	溝・攪乱坑多数	国府跡 11
25 次	2008	6ACA-A・B	広瀬町字西野 3243 番・3248 番	081001 ~ 081226	690	学術	溝・礎敷き遺構	
26 次	2008	6ADC-B	広瀬町字西野 3313 番	081218 ~ 081226	55	学術	溝・土坑・風倒木	
27 次	2009	6AFF-A	広瀬町字長塚 1244 番	090817 ~ 091216	580	学術	溝（道路跡）・ビット・風倒木	国府跡 12
28 次	2010	6ABA-B	広瀬町中土居 1305 番 1	101101 ~ 110131	59	学術	なし（風倒木のみ）	国府跡 13
29 次	2011	6ABA-C	広瀬町中土居 1299 番 1	111201 ~ 120229	116	学術	溝	国府跡 14
30 次	2012	6AAE-A	広瀬町字丸内 2612 番 1	121201 ~ 130228	81	学術	なし	国府跡 15
31 次	2013	6AAC-D	広瀬町字丸内 2600 番 1	140122 ~ 140314	140	学術	ビット	国府跡 16
32 次	2013	6AFF-F	広瀬町字丸内 2626 番	140218 ~ 140328	63	学術	なし	国府跡 17
33 次	2014	6AIB-C	広瀬町字荒子 1038 番	150105 ~ 150304	61	学術	ビット	
34 次	2015	6AGH-C	広瀬町字南野 955 番 3	160201 ~ 160315	132	学術	溝・風倒木	国府跡 18
		6AIF-E	広瀬町字荒子 985 番		81		溝・土坑・風倒木	
35 次	2016	6AIF-A	広瀬町字荒子 981 番	170113 ~ 170109	89.4	学術	溝	国府跡 19
		6AIF-F	広瀬町字荒子 982 番		69.6		溝	
36 次	2017	6AHE-D	広瀬町字中起 1234 番	170901 ~ 171130	210	学術	溝・ビット	国府跡 20
		6AIB-D	広瀬町字荒子 1039 番		149.5		溝（道路側溝）・ビット	
		6AKB-C	西富田町字東起 1349 番		72		風倒木	
37 次	2018	6AIA-A	広瀬町字荒子	181213 ~ 190303	69.3	学術	溝・ビット	国府跡 21
38 次	2019	6AKC-C・D・E	西富田町字東越 1322 番・1323 番 1324 番	190712 ~ 190920	380	緊急	竪穴住居・土坑・ビット（縄文） 土坑・溝	年報 22
39 次	2019	6AGD-G	広瀬町字南野 955 番 2	191205 ~	144.2	学術	溝・風倒木	国府跡 22
40 次	2020	6AFF-B	広瀬町字長塚 1248 番 1	200831 ~ 201119	399.04	学術	礎石建物・溝（築地）・溝・土坑 ビット・風倒木	国府跡 23
		6AFGA	広瀬町字長塚 1249 番		11.69		礎石建物？・溝	
		6AIA-F	広瀬町字荒子 1030 番		171.15		溝（築地）・風倒木	
合計					28574.1			

国・長：『伊勢国分寺跡（5 次）・長者屋敷遺跡（1 次）』 国・国：『伊勢国分寺・国府跡』
埋文年報：『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』 年報：『鈴鹿市考古博物館年報』

藤原 2014・2015)。

北方官衙の北に位置する金敷は、長者伝説の舞台として知られ『高津瀬村誌』には「金敷」の項に「古長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キシ若シ廣瀬村ヒヘイニ陥ルノトキハ之ヲ堀レト」と記される(水野 1907)。こうした口伝の存在からか、金敷の発掘は古来忌避されており、昭和の初めに陸軍北伊勢飛行場が建設された際も金敷を避けて軍用地が定められた。現状は一見前方後円墳を思わせる高まりとなっている。地権者の意向で本体の発掘調査は行えず、測量調査のみを行った(田部 2008)。外周部の調査の結果(田部 2007・2009)によれば、何らかの基壇を有する建物が存在する可能性が高いと考えられた。また、方格地割の中軸線に相当する位置で発見された幅 24m の南北大路が金敷や国庁の中軸線と一致することが確認され、三者の計画的な関連性は確実であろうとされた(田部 2010)。さらに、近年の調査で南北大路の西側溝にあたる溝が北方官衙と国庁の間にも延びることが確認された(藤原 2018)。このように街路による整然とした区画から、単なる地割というより方格街区と呼ぶことがふさわしいとされた(藤原 2019)。

しかし、国庁と方格街区の間では若干の工房様の掘立柱建物と竪穴建物が検出されたのみで(新田 2001)、遺構密度が低く、官衙的な建物や区画施設がほとんど確認されず、およそ南北幅約 150 m が空白地帯となっている。平成 26 年度以降はこの範囲において調査が進められ、北方官衙の南東隅に当たる「南野南」区の南に接して、「荒子東」区と呼ぶべき院(区画)が存在することが判明し、内部に瓦葺礎石建物が建てられていることも確認された(藤原 2016・2017・2019)。とはいえ、政庁の周囲では相変わらず建物等の確認にはいたっていない。

II 調査の経過

第 40 次調査は令和 2 年 8 月 20 日に地権者との土地賃貸借の契約が締結され、8 月下旬の着手を予定していたが、8 月後半から 9 月上旬にかけての台風 8～10 号の来襲とそれに伴う長雨により他の緊急調査等も順延し、重機等の手配にも支障が生じたため、実際の発掘作業の着手は 9 月中旬にずれ込んだ。現地作業は令和 2 年 8 月 31 日の現地確認を初日とし、11 月 19 日にすべての調査区を埋め戻し終了した。本来ならば発掘調査期間内に発掘調査指導会議を開催し、現地での指導を仰ぐところではあるが、市のコロナウイルス感染症対策の方針に基づき、調査期間内の発掘調査指導会議の開催は見送った。

以下、調査日誌を抄録することで調査の経過に替える。
《調査日誌抄》

令和 2 年 8 月 31 日(木) 曇/雨 現地において、平成 4 年に

設定した基準点を確認し(使用不可と判明)、土地境界確認。

9 月 13 日(日) 晴 6AFF-B 区草刈り。

9 月 14 日(月) 晴 隣地地権者等へ挨拶。

9 月 15 日(火) 晴 6AIA-F 区草刈後、小型重機を投入して 6AIA-F 区の表土除去。東西溝 SD360・361 を確認。

9 月 16 日(水) 曇/晴 引き続き重機で 6AFF-B 区のトレンチ表土除去。北西区のトレンチを 1 区、東辺に沿った長いトレンチを 2 区とする。2 区では南北 2 箇所に黒色土による大きな落ち込みを確認。1 区では、南辺築地基底 SA371 のものと見られる地山面を確認するも、内側溝 SD363 の内肩を確認することができず、追跡して東に大きく拡張したことにより瓦を含む巨大な土坑状の落ち込みの存在が判明。

9 月 17 日(木) 曇/雨 雨の予報のため現場休み。

9 月 18 日(金) 曇 三重大学生の協力で調査区内に国土座標を振り込み、基準杭設置。

9 月 21 日(月) 晴 発掘調査用資材搬入。

9 月 22 日(火) 晴 作業員 3 名投入。6AIA-F 区の壁立て。設定ピンによる 3 m 方眼の設定。

9 月 24 日(木) 6AIA-F 区遺構検出。三重大学生の協力で 6AFF-B 区の設定ピン打設。

9 月 26 日(土) 曇 6AFF-B 区拡張範囲の草刈。

9 月 28 日(月) 晴 6AIA-F 区遺構検出続き。6AFF-B-1 区拡張部分、表土除去。

9 月 29 日(火) 曇 6AIA-F 区遺構検出続き。6AFF-B 区拡張部分表土除去。

9 月 30 日(水) 晴 作業員調整休。6AIA-F 区略測作業。

10 月 1 日(木) 晴|曇 作業員 6AIA-F 区 SD360・361 にサブトレンチ 1・2・5 を設定し掘削。6AFF-B-2 区に移り、壁立て作業。重機は 6AFF-B-1 区拡張部分表土除去続き。

10 月 2 日(金) 晴 作業員壁立て作業継続。重機による表土除去は 6AFF-B-1 区の拡張を継続し、第 1 次調査のトレンチ跡と SB002 の北西隅部を確認。終了後、建物 SB002 の南東隅を明確にするため 6AFF-B-2 区の南端を西に拡張して 3 区とする。
10 月 5 日(月) 曇 作業員は一旦 6AIA-F 区に戻り、SD360・361 にサブトレンチ 3・4・6・7 を設定し掘削。SD360・361 は調査区内を途切れず貫通していることが確認され、調査区内に南門が存在する可能性は低くなった。

10 月 6 日(火) 曇 本日から作業員を増員する。6AFF-B-2・3 区遺構検出。

10 月 7 日(水) 晴/雨 6AFF-B-1 区遺構検出。西辺築地内溝 SD363 にサブトレンチ 8～10 設定。午後降雨。

10 月 8 日(木) 雨 降雨のため作業中止。

10 月 9 日(金) 雨 台風 14 号接近。作業中止。

10 月 12 日(月) 晴 6AFF-B-1 区検出。拡張部分設定ピン打設。

10 月 13 日(火) 晴 6AFF-B-1 区検出続行。北半を占める土坑状の落ち込みの状況と下層遺構の有無を確認するためサブトレンチ 11～14 を設定する。大部分が瓦を抜き取るための新しい攪乱であることが判明。

10 月 14 日(水) 晴 6AFF-B-1 区サブトレンチ掘削継続。SB002 の掘込地業・外周溝 SD363・365 及び西辺築地 SA371 の検出作業完了。検出状況写真撮影。B-2 区において SB002 の東辺外周溝 SD366 の状況を確認するため拡張区 1・2 を人力で

掘削。

10月15日(木) 晴 6AFF-B-3区でSB002の南東隅部を確認するため精査。西壁にサブトレンチ15を設定。新たに東西溝SD368を確認。

10月16日(金) 晴 作業員調整のため現場休み。

10月19日(月) 曇/雨 業務都合にて現場休み。

10月20日(火) 晴 本日から作業員減員。6AIA-F区清掃・写真撮影。6AFF-B-2・3区遺構検出状況実測。

10月21日(水) 晴 6AFF-B-2・3区 SD368の広がりを確認するためサブトレンチ16を設定。6AIA-F区遺構実測。

10月22日(木) 曇/雨 6AFF-B-2・3区に、拡張区3・4区を掘削。拡張3区によりB-2区の北半の落ち込みが新たな建物SB370の掘込地業であることを確認できた。拡張4区ではSB002の外周溝SD366の南東角を検出。午後降雨。

10月23日(金) 雨 作業中止

10月26日(月) 晴 6AFF-B-2区, SB370掘込地業・外周溝にサブトレンチ17～20設定・掘削。小型重機を導入, 6AFG-A区表土除去。掘削後に壁立て・遺構検出。国史跡伊勢国府跡調査指導会議構成員の小澤毅三重大学教授が別案件で鈴鹿市考古博物館に来館されたため, 午後現場を視察していただく。

10月27日(火) 晴 6AFF-B-2区SB370付近清掃・写真撮影。6AFG-A区清掃・検出状況写真撮影。SB370の外周溝SD362が6AFF-B-1区に及んでいることが判明したため, サブトレンチ22～25を設定して確認したうえ, 確認できる面まで攪乱層を掘り下げ。6AFG-A区西壁にサブトレンチ26を設定掘削。6AIA-F・6AFG-A区レベル入れ。

10月28日(水) 晴 6AIG-A区写真撮影。6AFF-B-1区SD362検出継続。SD362から残りの良い2枚重ね瓦出土。SD362に重複して土坑SK373を確認。

10月29日(木) 晴 作業員都合にて現場休み。6AIA-F区サブトレンチセクション実測。

10月30日(金) 晴 SK373の検出を続けるも西半は攪乱により削平される。SD362検出状況撮影。

11月2日(月) 曇/雨 降雨のため作業中止。

11月3日(火) 晴 6AFG-A区平面実測・6AFF-B-1区SD362検出状況実測。

11月4日(水) 晴 都合により現場休み。

11月5日(木) 晴 6AFF-B-1区サブトレンチ清掃, 写真撮影。6AFF-B区レベル入れ。

11月6日(金) 晴 都合により現場休み。記者クラブ資料提供。

11月9日(月) 晴 6AFF-B-2区の清掃北から着手。各サブトレンチを写真撮影。6AIA-F区のサブトレンチ実測。

11月10日(火) 曇 全体清掃のため作業員増員。6AIA-F・6AFF-B-2区を清掃。中日新聞記者現地取材。

11月11日(水) 晴 6AFF-B-1区清掃作業。完了後, 白線引き。伊勢新聞記者現地取材。

11月12日(木) 晴 白線引き継続。午後ドローンによる空中写真撮影。完了後, シート・土嚢等の片付け。

11月13日(金) 晴 現地公開準備。

11月14日(土) 晴 現地公開。79名が参加。

11月15日(日) 晴 6AFG-A区・6AFF-B-2・3区の残りサブトレンチのセクション実測。

11月16日(月) 晴 6AFF-B-1区サブトレンチのセクション実測。亀山市職員3名現地視察。

11月17日(火) 晴 遺構保護のための山砂搬入。作業員手作業によりサブトレンチを埋め・遺構の上面を覆う。出土遺物取り上げ。午後から小型重機にて6AFG-A・6AIA-F区埋め戻し着手。機材運搬。本日で作業員撤退。

11月18日(水) 晴 6AFF-B区埋め戻し。機材運搬。

11月19日(木) 晴 午前中で埋め戻し完了。現地調査終了。

III 発掘調査

1 調査の目的と方法

昨年度の国史跡伊勢国府跡調査指導会議において, ここ数十年継続してきた北方官衙・方格街区の外周部の確認調査にある程度目処がついたことから, 方格街区の史跡未指定範囲について区画施設と併せて内部の調査も実施して遺構の遺存状況を把握し, 今後の追加指定につなげていくという方針が了承された。

このことに伴い, 今年度の調査は方格街区のうち既に史跡指定されている南野南区・長塚南西区の間に位置しながら, 未だ史跡指定を受けていない長塚南東区を対象として実施することにした。

長塚南東区では, 唯一平成4年度の第1次調査長塚1区(今回の6AFF-B区と重複)で調査が実施されている。そこでは「建物規模及び礎石建物, 掘立柱建物の何れかも不明であるが」「幅60cmの東西の土手状遺構と, その内部(南側)に明らかに故意に埋め込んだ黄褐色土混入黒灰色粘質土層」を検出し, 「土手状の遺構は建物基壇を形成する際の周堤」と考え建物跡SB02(本調査では「SB002」)とすると報告されている。

調査対象地6AFF-B区が南北大路に面した想定西辺築地をも含むことから, SB002の構造の再確認を兼ねて西辺築地およびその他建物の確認のため6AFF-B区を第一の調査対象とした。同地の地権者が想定南辺築地とそのすぐ北にあたる土地6AIA-F・6AFG-Aも所有されていることから併せて調査の対象とした。

作業は, 小型重機を用いて表土耕作土を除去した後に, 人力で遺構検出を行った。遺構は原則検出のみにとどめ, 攪乱等により遺構の掘方の認定が困難な部分および溝の断面記録が必要な部分にのみ幅0.3～0.4mのサブトレンチを設定して掘削を行った。

調査区及び検出した遺構は, 県道辺法寺加佐登停車場線と調査区西側の水路側溝に既設の3級基準点基-4・基-5から日本測地系に基づく座標と水準高を振り込み, 設定ピンを用いた方眼を設定し平面実測した。写真は, 35mm デジタル一眼レフカメラを主とし, 35mm 一眼フィルムカメラで白黒・カラーボジを併せて撮影した。

2 調査の成果

(1) 基本層序

調査地は現在小麦・大豆等の畑として利用されている。南方・東方に向かってわずかに傾斜するものの、ほぼ平坦といってよい地形である。6AFF-B 区において地表は北西端で標高 50.6 m、南東端で 50.2 m 前後、遺構検出面は北西端で標高 50.2 m、南東端で 49.9 m 前後を測る。6AIA-F 区では、地表は北辺で標高 49.9 m、南辺で 49.6 m 前後である。遺構検出面は 49.4 m 前後を計る。

基本層序は、第Ⅰ層：黒褐色砂質土（耕作土）、第Ⅱ層：黒色シルト（クロボク）、第Ⅲ層：黒褐色砂質シルト（地山漸移層）、第Ⅳ層：黄褐色シルト（地山）、第Ⅴ層：礫を多く含むにぶい黄褐色砂質シルト（地山下層）となる。本来は第Ⅱ層となっているクロボクが地表まで覆い厚く堆積していたはずであるが、耕作によりほとんど失われ、遺構埋土および耕作の攪乱が地山に達していない部分に痕跡的に残るのみである。

6AFF-B 区北西部では第Ⅲ層さえ耕作により失われ、第Ⅳ層が遺構検出面となる部分もある。同様に、第Ⅴ層礫層へは 6AFF-B 区北西部では 49.9m 前後で達するのに対し、南部では 49.3 m あたりまで掘削しても現れない。基盤層自体が西から東へ、北から南へいくほど低く緩やかに傾斜していることが伺える。

(2) 6AFF-B 区

対象地は南北約 53 m×約東西 24 m の畑である。まず西辺築地の存在を確認するため、北西隅から西辺に沿って幅 4 m×延長 10 m の南北方向トレンチ 1 を設定した。次に、すでに確認されている SB002 の規模と更なる建物の存在の有無を確認するために東辺に沿って幅 2 m×延長 52 m の南北方向のトレンチ 2 を設定した。

トレンチ 1 では築地基底と見られる地山面が直ちに確認されたが、内（東）溝に当たる落ち込みの東肩がなかなか確認できず、東へと徐々にトレンチを掘っていった結果、瓦を含んだ土坑状の落ち込み（後に攪乱土坑と判明）が広範囲に広がっていた。落ち込みの広がりや東・南へ追跡していった結果、再確認を予定していた第 1 次調査長塚 1 調査区の SB002 付近まで南に広げることになった。さらに、2 トレンチにおいて新たな建物基壇と見られる遺構が確認されたため、その西辺を確認するために 2 トレンチに迫るまで東に拡幅した結果、東西 13 m×南北 23.5m の面的な調査区となり、6AFF-B-1 区とした。

トレンチ 2 では北端から 4 m ほどで幅 1m ほどの東西溝とそれに続き延長 11.5 m にわたり土坑状の落ち込みが確認され新たな建物遺構確認の期待が高まった。また、南半分では延長 23m にわたって土坑状の落ち込みがみられ、SB002 に関連する遺構と思われた。このトレンチ

を 6AFF-B-2 区とした。6AFF-B-2 区には、わずかにかかる遺構の追跡のため拡 1～拡 4 と名づけた 2 m×2 m 程度の小規模な拡張区を 4 箇所追加した。

検出が進むに伴い南端付近で SB002 の南東隅が確認されたことから、西側に南北 7 m×東西 5 m の範囲で拡張し 6AFF-B-3 区として建物南辺部の状況把握に努めた。築地 SA371 平成 21 年第 27 次調査 6AFF-A 区で検出された SD319 と今回検出された南北溝 SD363 が約 3.6m の間隔を保って並行することから、この間を築地基底と判断した。外周溝の深さも浅くかなり削平を受けていることから本来の基底幅は 3.0 m つまり 10 尺であろう。調査区北西隅から西辺に沿って延長 11.4 m にわたり検出した。基底は地山まで削平され、かつ地境の耕作溝が中央を縦断している。地上部の版築どころか地下の掘込地業や添柱の痕跡も留めない。

礎石建物 SB002 外周溝 SD363・SD365・SD366 によって区画される東西 14 m×南北 23 m の範囲に建つ南北棟の建物である。SD366 掘方の肩から求められる方位の振れはおよそ N0.5° W である。区画溝の内部には東西 12.9 m×南北 21.9 m あまりの方形に掘込地業が認められる。外周溝と掘込地業の間は 0.5～1 m の地山面が検出され、これが第 1 次調査の際の「幅 60cm の東西の土手状遺構」にあたるものである。本来、掘込地業は一体のものと考えられるが、削平を受けているため浅い部分は地山が現れ、B-1 区内では西から a-c の隅丸方形の 3 ブロックに分かれて検出された。地業から外周溝までの距離は北妻・東側では 0.6～0.8 m、西側では 0.4 m と狭くなっているが、SD363 が築地内溝と重複していて、再掘削を受けたことによるものであろう。

当然、築造当時は地山面上に厚さ 0.5 m 程度の黒色シルトが覆っていたとみられ、外周溝と地業の掘方は傾斜を持っているため地表面では溝と地業の肩がほぼ一致していたはずである。

西側の地業 a は幅 6 m を測り、南壁から延長 5 m を検出した。埋土は地山の黄褐色砂質シルトが混じるやや粘りのある黒色シルトである。偶然にも第 1 次調査の長塚 1 区の幅 4m の南北トレンチがこの地業 a にすっぽり収まるように設定・掘削されていて、地業を地山面まで掘り抜いて調査を行っている。同調査による断面図では、土手状の地山面から底面の深さは 0.1～0.2 m 前後と浅く、埋土の水平の層状はなさず 1～2 m ほどの大きなブロックを単位として埋められている状況がうかがえる。地山の第Ⅲ層の砂質シルトより粘りがあり締まってはいるが、突き固めたといった状況ではない。

平面図では、底面の西半分は平坦で西辺から 4 m あまりの地点でわずかに南北方向の土手状の高まりが認められ

る。すでに掘削され切り合いの確認はできないが、地業b・c同様、本来は西外側の幅4mと内側の幅2mの2つのブロックから構成されていた可能性が高い。

地業bは幅が1.0mあまりと狭く、南壁から4.5mあまりを検出した。本来は地業a・cと接続していたものであろうが掘り込みが甘かったため中央の深い部分のみがかりうじて残存し、分離したように見えるのであろう。埋土は地業a同様であるが、地山土の比率が多く明るい。

地業cは、B-1区とB-2区にまたがり、幅4.3mを測る、B-1区では南壁から4.5mあまりを検出した。埋土は地山土の比率が少なく、黒褐色シルトに近い。B-2区では北東、南東の両隅を検出し、南北の延長が21.7mであることが確認できた。ただし、B-2区において東辺の北半約12mは直線的であるのに対し、以南はやや東に張り出しラインの凹凸が認められる。このことから、南と北についても掘削の作業単位が異なる可能性が高い（南半を仮に「地業e」とする）。

SB002の地業は東西4×南北2の8単位の隅丸長方形の土坑を重ねあうように掘削し、埋め戻すかたちで施工されていたとみておきたい。

礎石建物SB370 SB002の北東に隣接して検出された。外周溝SD362・SD369によって南北13m、東西4m以上が区画される。東側は調査区外にいたるため東西規模は不明であるが、東西棟の建物である。SB002基壇の北辺とは1.5mしか離れておらず、軒と軒を接するように建てられている。SD362の東辺からは方位の振れはほとんど認められない。

内部には南北11.5m×東西3.2m以上の方形の掘込地業dが認められる。拡張2区で南西コーナーを検出し、シャープな矩形を成すことが判明した。中央部は掘り込みが浅いためか調査区東壁付近で南北6.4m地山が表れており、そのためコの字の溝状を呈する。北側の地業はSD362から0.7m離れ、幅約2.7mで、掘方深さは0.26mを測る。西妻はSD362から0.8m離れ、幅約2.5mで、掘方深さは0.32mを測る。南側の地業はSD369から1.0m離れ、幅約2.4mで、掘方深さは0.18mとやや浅い。

埋土は、特に南北側の地業で黒色シルト層と地山土の褐色砂質シルト粒を含む黒色シルト層が0.05～0.1mの厚さの互層を成していることが観察できるが、水平な層を成すとはいえず、また版築といえるほどの締めりも持っていない。

西妻の地業では、黒色シルトの層が厚く、南北側とはやや様相が異なる。

溝SD362 SB370の外側溝である。B-2区北端から4mの地点で、東壁から表れ西に4m延びて、ちょうどB-1区に及んだ地点で直角に南に折れ、13.5m延びてSD365

の手前に及ぶ。北辺では幅1.0m、西辺では1.1～1.2mを測る。西辺で2箇所ほど風倒木痕と重複している。深さは未掘のため不明である。埋土は単純な黒色シルトである。西辺北西隅付近で土師器甕(20)が、南寄りでは3枚の平瓦(24～26)が重ねられて投棄された状況で出土した。

溝SD363 西辺築地SA371の内側溝に当たる。B-2区北壁から南壁にいたる23.3mを検出した。南半はSB002の外周溝を兼ねる。幅はおよそ2.2m、検出面(地山)からの深さは北壁サブトレンチ8で0.4m、中央のサブトレンチ8で0.3m、第1次調査のサブトレンチでは0.15mを測る。底面の深さはサブトレンチ9で49.7m、サブトレンチ8で49.8mを測る。特に南に向かって降っているようでもない。北半部では後世の瓦抜き取りのために上層部は大きく攪乱を受けており、東側の肩はほぼ失われている。そのため本来の埋土は底部付近の0.1～0.2mのみに残り、黒色シルトまたは地山土が若干混じる黒色シルトである。残存する下層部はほとんど瓦を含まない。SB002の西に接する部分ではそれほど後世の攪乱を受けておらず、瓦を含む層の残存が認められる。

溝SD365 SB002の北外周溝にあたる東西方向の溝。SB002の北妻の中央付近に延長6mほどに延びる。東端で急に狭まり、SD367となって東外周溝SD366へと続く。西端は1次調査の際削平され、東同様であったかは確認できない。幅は0.6～0.8m、地山面からの深さは0.2mを測る。埋土は黒色砂質シルトである。

溝東端付近の検出面で若干の砂礫とともに瓦片の堆積が見られ、それに混じって土師器坏(15)が出土した。このレベルがSD365の上部が雨落ち溝として機能していた時点での底であった可能性が考えられる。

溝SD366 SB002の東・南外側溝に当たる。B-3区の西壁から表れ東に6m延びた後、直角に北に折れ、24.5m延びる。北端部と東肩を確認するため拡張区1・3-4を設けて検出を行った。北端はSD365の北肩ラインと一致するとみられる。北端ではSB370の南外側溝SD369と重複するが、埋土がほぼ同じ黒色シルトなため切り合いの判定は難しい。北端部のサブトレンチ19で幅1.0m、深さ0.3m、底面のレベルは48.7mを測る。南側のサブトレンチ21では幅1.1m、深さ0.4m、底面のレベルは48.6mを測る。南東隅で西に折れると、幅及び深さが急に増大し、B-3区西壁のサブトレンチ15では幅1.8m、深さ0.6mとなる。埋土はほぼシンプルな黒色シルトである。東辺南半は上層に攪乱層が乗っている。サブトレンチ15の上層断面に攪乱を免れた平瓦が残っていたほか、南東コーナー付近の検出の際には比較的多く土師器片が出土している。

溝 SD367 SD365 の東端が急に窄まり SD366 へと延びる延長 4.5 m あまりの溝である。幅は 0.2 m を測る。SD365 の深い部分のみが細溝状に残ったものである可能性もあるが、直線的な東西溝ではなく緩やかに南に湾曲していることから、とりあえず別溝とした。埋土は黒色シルトである。

溝 SD368 SB002 の南辺外周溝 SD366 の南に約 0.8 m 離れて存在する東西方向の溝あるいは溝状の土坑である。上面は攪乱層により厚く覆われるため、サブトレンチ 15・16 による確認にとどめた。サブトレンチ 15 では幅約 2.0 m、深さ 0.3 m を測る。埋土は黒褐色シルトまたは地山土を含む黒色粘質シルトである。攪乱層の境となる上面には北側から流れ込んだような瓦片の堆積が見られる。

溝 SD369 SB370 の南外周溝にあたる東西溝である。拡張 1 区においてその存在が判明した。当初は SD366 の北端が幅 1.5 m に広がっていると考えていたが、サブトレンチ 19 によって SD366 と直角に交わり端部を共有する溝の存在が判明した。拡張 1 区の東壁から延長 1.5 m を検出した。西端は SD366 の西肩ラインにそろえ端部は矩形を成す。幅はサブトレンチ 19 内でようやく東側底部の立ち上がりが見られるので 2.5 m 強はあり幅広である。深さは SD366 とほぼ同じ 0.4 m で、埋土は黒色シルトである。

土坑 SK364 調査区北壁のサブトレンチ 9 の範囲では、築地 SA371 の内側溝 SD363 の東側の肩は検出できなかった。さらに東側のサブトレンチ 10 において、築地東辺から 4.2 m 離れた位置でようやく掘方の立ち上がりを確認した。このことから築地内溝 SD363 を拡張した、あるいは重複する溝状の土坑が存在するものとして SK(SD)364 とした。東西幅は 2.4 m 以上、南辺は 2m ほど南のサブトレンチ 13 の中ほどにおいてわずかに掘方の立ち上がりが見られる。深さは検出面から 0.3m 程度を測る。埋土は黒色シルトである。

土坑 SK373 B-1 区中央北寄りで見出された方形の土坑である。東辺が建物の西外側溝 SD362 を切って掘られている。西半は後世の攪乱によってほとんど失われているがサブトレンチ 14 において北辺の掘方の立ち上がりとともに伴う瓦の堆積が認められ、サブトレンチ 12 において西辺の立ち上がりの痕跡が認められることから、規模は東西約 7 m × 南北約 4 m とみられる。深さは 0.2m 前後を測る。埋土は黒色シルトで瓦片を含む。SK364 もあわせ、土採取と破損瓦など不要部材の廃棄を兼ねた土坑と考えられる。

攪乱土坑 築地 SA371・建物 SB002・370 に囲まれた範囲には大規模な攪乱が存在する。この範囲には土坑

SK364・373 とそれ以外にも大量の瓦を含んだ土坑が存在し、また建物・築地の外周溝にも大量の瓦が含まれていたと想像できる。そのため耕作の妨げとなるこれら瓦を除去するための大規模な掘削作業が行われ、徹底的な除去が行われたことによる。サブトレンチ 14 の断面から分かるように、東西方向に 1 m 前後の間隔で幅 0.5m ほどの溝を平行して掘り、瓦溜まりにあたると横に掘り広げてすべての瓦を除去している。

(3) 6AIA-F 区

対象地は南北約 20 m × 東西約 22 m の畑である。まず西辺および東辺に幅 1 m × 延長 15 ～ 16 m の南北方向トレンチ 3・4 を設定した。結果、両トレンチとも北端から約 3 m の地点で幅約 1.5 m の溝状の落ち込みが確認され、それより南側では近・現代の耕作溝が確認されたのみであった。そのため、この溝が長塚南東区の区画溝にあたると考えられた。この溝 SD361 の中心からトレンチ南端までは 12 m であり、南面に最大幅 12 m の東西街路が存在した場合、南端に溝肩が現れてもおかしくないはずであるが、みとめられず、6AIA-A 区や 6AHD-A ～ C 区での調査成果と併せ、北方官衙（方格街区）の南面に街路が無い可能性がさらに高まった。

そのため面的な調査は借用した土地の北半とし、南北 8 ～ 9 m × 東西 18 m の調査区を設定し、表土除去を行った。溝 SD361 は調査区北辺から 3 m 弱離れており、北辺付近には耕作溝が密集している。長塚南東区の南辺が築地塀で区画され、SD361 がその外溝に該当するなら、内溝の想定ラインは北辺壁の下にあたる。しかし、調査区の北側は幅 2m の市道広瀬 134 号線が通るため拡張には限界があり、北壁から幅 0.4 ～ 1 m、延長 0.7m 程度の南北方向サブトレンチ 1・2・4 等を敷地ぎりぎりまで伸ばして掘り下げた。その結果、SD361 に並行する内溝 SD360 を検出することができた。検出した 2 条の溝は全掘は行わず、SD360 については確認のため設定したサブトレンチを、SD361 については東西両端と区画中軸想定地の 3 箇所サブトレンチを設定し、断面観察をするに止めた。

遺構検出面のレベルは西辺で標高 49.5 m、東辺で 49.3 m と若干東に傾斜し、南北の傾斜はほとんどない。築地 SA372 今回検出された東西溝 SD360 と SD361 が約 3.3m の間隔を保って並行することから、この間を築地基底と判断した。調査区東辺から西辺までの延長 17.5 m を検出した。上部が削平されていることから本来の基底幅は 3.0 m つまり 10 尺であろう。基底の西半は地山が露出しているが、サブトレンチ 6 から東は、基底上面を掘り込み、地山土由来の明黄褐色砂質シルトに黒褐色シルトが混ざった土層に覆われている。土自体

は築地の版築土由来のものと思われ、検出時には掘込地業の最下部の可能性もあって考えていた。しかし、サブトレンチ 2 の断面をみると掘り込みの底面は地業と判断するには著しく不整であり、後世に築地を破壊した際の攪乱の痕跡とも考えられる。

SD360 調査区北辺に重なり検出された東西方向の溝である。上面に耕作（地境）溝が重複し、これを除去してようやく南肩を検出することができた。北肩は市道の下となり確認できず、幅は不明である。調査区西壁からサブトレンチ 7 までの延長 13 m あまりが確認され、それより東側のサブトレンチ 27・2 では、完全に耕作溝が重複し、肩から底部まで削平されて埋土はほぼ失われている。

サブトレンチ 1 ～ 7 の間では南肩ラインはほぼ直線的で振れは N89.2° E である。

サブトレンチ 1 では掘方の断面はほぼ箱形で、底面の標高は 48.73 m で、検出面からの深さ 0.72 m を測る。埋土は黒色シルトである。底部から 0.1 m ほど浮いた地点で土師器甕（16）が出土し、底面に張り付いて平瓦が出土した。サブトレンチ 4・7 では底面の標高が 48.95 m 前後で、底面は地山面とは逆に西に向かって傾斜しているようにみられる。いずれのサブトレンチからも瓦の細片がごく少量出土するのみである。

SD361 調査区中央を東西によぎる溝である。延長 18 m を検出した。幅はサブトレンチ 6 付近で最大で 1.8 m、西壁で 1.3 m、東壁付近で 1.5 m を測る。断面は逆台形を呈し北肩のほうに急に立ち上がる。埋土は黒色シルトで、上面から掌大の瓦片が出土する以外は、ほとんど遺物の出土は見られない。

溝北肩のラインは比較的直線的で、求められる振れはおよそ N89.5 ～ 89.7° E と正方位に近い。

底面の標高は西端のサブトレンチ 5 で 48.91 m、検出面の深さ 0.56 m を測り、東端のサブトレンチ 2 で 48.87 m、深さ 0.47 m を測る。底面はほぼ水平かわずかに東に傾斜する程度といえる。

サブトレンチ 3 は、長塚南東区の想定中軸線にあわせ設定したが、幅 1.3 m、深さ 0.5 m と、特にその部分で溝が狭く、または浅くなるといった状況は認められなかった。

(4) 6AFG-A 区

6AIA-F 区から市道広瀬 134 号線を挟んだ北側の畑である。東西約 8 m × 南北約 9 m の畑で、調査前は耕作放棄され、雑草が生い茂っていた。面積が狭小であるものの、長塚南東区の南辺区画中央の内部にあたることから、東西 2 m × 南北 4 m のトレンチ状の調査区を設定して、調査を行った。

表土を除去すると調査区の北半は黒色シルトの落ち込み SD374 であったため、北肩を確認するため可能な限り北に拡張し、結果南北 6.7 m のトレンチとなった。トレンチ北端に新たな落ち込み SX (SB) 375 を検出した。この調査区も遺構の完掘はせず、西壁にサブトレンチ 26 を設定して、断面を観察するにとどめた。

地表面の標高は約 49.85 m、ほぼ平坦である。遺構検出面のレベルは約 49.35 m を測る。

溝 SD374 調査区いっぱいに確認された。幅 4.2 m の東西方向の溝とみられる。断面は浅い逆台形を呈する。深さは最大で 0.3 m、平均 0.2 m と比較的浅いが、底面には礫層が表れている。埋土はやや砂質の黒色シルトで、下層には掌大の礫を多く含む。南肩付近の埋土には若干の瓦片を含む。

両肩に沿って、幅 0.6 m、深さ 0.15 ～ 0.2 m の東西方向の溝状に後世の攪乱が認められる。上層に含まれていた瓦を抜き取るためのものか。

SX (SB) 375 調査区の北端で南北幅 1.2 m 分を検出した。東西方向の土坑または溝状の落ち込みである。検出面から底面までの深さは約 0.2 m である。埋土は均質な黒色シルト（クロボク）である。遺物は含まない。

サブトレンチ 26 の断面観察から、埋土のクロボクは地山面より 0.2 m 上まで連続して堆積しており、土壇状を呈することが確認された。上面には、後世の耕作の凹凸が認められる。

外（南）側に瓦を含む溝 SD374 を伴い、掘方 SX375 との間に地山が削り残された幅 0.5 m の土手状の高まりが認められるといった構造が、6AFF-B 区の SB002・SB370 の掘込地業と外周溝およびその間の地山の関係とよく似ている。このことから、この土壇状のものが両者同様に礎石建物 SB375 の基壇である可能性が高いと考える。ただし、埋土がほぼクロボクで地山土の混入がほとんどないことや層状の構造がほとんど認められないことが若干の疑問点といえる。今回は調査区の設定上これ以上の拡幅ができなかったことから建物の可能性を指摘するにとどめ、次年度以降の調査に期待したい。

(5) 出土遺物

今回の調査では、建物基壇及び築地の外周溝等の主要遺構はサブトレンチによる断面観察にとどめ、また瓦溜りの攪乱土坑についても完掘は行わなかった。そのため出土量は 3 調査区を併せ、コンテナボックス 25 箱にとどまる。うち、23 箱が瓦類であるが、攪乱により破碎された小破片が大部分を閉める。平瓦で全形が確認できるのは SD362 から重なった状態で出土した平瓦 3 点のみである。丸瓦は全長が確認できるものはなく、玉縁部の

個体数自体少ない。軒丸瓦の瓦当面は2点出土したのみで、軒平瓦の瓦当部は全く確認されなかった。また、伊勢国府を特徴付ける遺物である文字押印瓦についても確認されなかった。

土器類は出土量が2箱と極めて少ないうえ、図化困難な小破片がほとんどである。須恵器は比較的少なく、土師器が多い。また、これまでの調査と比較すると、坏・皿といった供膳具に比べて、煮炊具である甕が多い印象を受ける。坏・皿は緻密な胎土で橙色を呈する畿内的なものがほとんどであるが、一部にはやや砂粒を含みにぶい黄橙色を呈する在地的なものもある。

須恵器坏蓋(1・2) いずれも天井部から口縁部にかけて屈曲はほとんどなく、端部は小さく下方に折り曲げる。(1)はSD362出土。(2)は焼成甘く軟質。SK373から出土。須恵器坏身(3～5) (3)は径13.6cm、器高2.0cmと小型で扁平な坏。焼成はやや甘く、ぶい黄褐色を呈する。6AFF-B-2区検出時の出土。(4・5)は底部のみの破片。(4)は焼成甘く軟質。6AFF-B-1区北半検出時の出土。(5)焼成は良好で硬質、黄灰色を呈し、底面には火だすきが認められる。6AFF-B-2区検出時の出土。

須恵器瓶類(6) 胴部下半の破片。焼成は良く、外面に灰オリーブ色の自然釉がかかり、別固体の融着痕が認められる。SA371検出時の出土。

須恵器甕(7・8) いずれも胴部の破片。(7)の焼成は良好で灰オリーブ色の自然釉が厚くかかる。外面並行叩きで、内面の同心円あて具痕はナデ消される。6AFG-A区検出時の出土。(8)も焼成は良。外面並行叩きののちカキメを施す。内面はナデ消されるが、あて具痕は微かに残る。6AFF-B-1区サブトレンチ24付近から出土。

土師器坏(9・12～15) (9)は有高台の坏。高台は断面矩形でやや内傾して付く。胎土は密で軟質、橙色を呈する。6AFF-B-1区サブトレンチ13から出土。(12・13)は口縁の立ち上がりが低い坏。体部は直線的に広がり、口縁端部は丸くおさめる。(12)は外面体部から底部にかけては横方向にへう磨き調整される。内面には微かに暗文の痕跡が認められる。6AFF-B-2区検出時の出土。(13)は表面が荒れる。底部と体部の境に穿孔がみられるが、人為的なものかは不明。SD362検出時の出土。(14・15)は見込みの深い坏。体部は外に広がりながら直線的に立ち上がる。口縁部は幅広の横ナデにより引き上げられわずかに外反する。(14)は内面底部にらせん状の、体部内面に放射状の暗文が施されるが、極めて雑で、線も弱い。(15)には暗文が認められない。

土師器皿(10・11) 体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部はヨコナデ調整によりわずかに内傾する。体部から底部にかけては横方向にへう磨き調整される。(10)

はにぶい黄橙色を呈する。

土師器甕(16～20) 口縁が水平方向に開き、端部は小さく上方に摘み上げられる。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ調整される。頸部内面に強いヨコナデで面を取る。(16)はSD360サブトレンチ1から出土。(17)は6AFF-B-2区検出時の出土。(18)は胴部破片。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ調整される。SB370の掘込地業d上面から出土。(19)は口縁端部を短く外反させる。内外面とも横ナデ調整される。(20)口縁は直立気味で、端部は面を取らず丸くおさめる。外面はタテハケ、内面はヨコハケメ調整される。SD362から出土。

土師器甕(21) 甕の底部と見られる。厚手の器壁を持ち、平底には穿孔が施される。焼成は良好で橙色を呈する。胎土も緻密。6AIA-F区検出時の出土。

重圈文軒丸瓦(22～23) 伊勢国府に特有の三重圈文の軒丸瓦である。(22)は瓦当面の径がおおよそ14.2cm、各圈の内径は内から4.1cm、8.4cm、12.8cmを測り、IA2型式に該当する。焼成は甘く軟質で、灰白色を呈する。6AFF-B-1区サブトレンチ22・23間の検出時に出土。(23)は外圈(第3圈)のみの破片で、突出が8mmと高い。焼成はやや甘く、灰色を呈する。6AFF-B-1区北半検出時の出土。

平瓦(24～26) 一枚作りの平瓦。(24)は凸面に縦方向の縄目叩きを施すものの、粘土板切り出しの糸切り痕を留める。凹面は布目圧痕を横方向に撫で消す。側端は2面に面取りされる。焼成はやや甘く、灰色を呈する。凹面の磨耗が著しい。(25)は凸面に縄目叩き、内面は糸切り痕と布目圧痕が明瞭に残る。側端は3面にシャープな面取りがされる。焼成は良好で、堅緻。灰～黄灰色を呈する。湾曲が強いタイプ。(26)は、凸面に縄目叩き、内面は糸切り痕と布目圧痕が明瞭に残る。側端は2面に面取りされる。焼成は普通で灰白色を呈する。3枚ともSD362上面で重なった状態で出土した瓦。

丸瓦(27) 丸瓦はすべて玉縁式である、全形をとどめるものは1点も無い。最も残りの良い個体を取り上げた。(27)は玉縁式の丸瓦で、瓶形の内型に粘土帯を貼り付けて筒状に形成したのち、内面側に刃物で割線を入れて半裁することにより作成される。側縁の調整は行われず分割時の割線とバリがそのまま残る。凸面は縄目叩き痕を横方向のナデで丁寧消す。内面には布目が明瞭に残る。焼成は普通で、灰色を呈する。6AFF-B-1区瓦溜土坑検出時の出土。

IV まとめ

第40次調査では、北方官衙方格街区の長塚南東区の西半部を調査の対象とした。

区画施設としては、第 27 次調査 6AFF-A 区において南北大路の東側溝として検出された SD319 に 6AFF-B-1 区の西辺で検出された南北溝 SD363 が約 3.6m の間隔を置いて並行し、この間が西辺築地の基底部となる。また、6AIA-F 区において東西方向の溝 SD360 と SD361 が約 3.3 m の間隔を置いて並行し、この間が南辺築地の基底部と考えられる。調査前の想定通り、長塚南東区も築地塀を巡らせた院を構成することが確認された。

これまでの北方官衙の調査では、長塚南西区 6AHD-C 区の第 13 次調査によって南辺築地の内外側溝が南辺の中心部で幅 12m にわたり途切れることから、そこに南門（正門）として礎石建ちの八脚門 SB143 が存在したと推定されている。長塚南東区は長塚南西区と南北大路を挟み相対する位置にあり、6AIA-F 区はちょうど想定される長塚南東区区画の南辺 114m（380 尺）の中心が位置することから、長塚南西区同様に門の発見が期待されていた。しかし、結果として SD360・SD361 は幅も深さも変化することなく貫通しており、正門としての門の存在は確認できなかった。東西に分かれて通用口的な小規模な門が存在する可能性が考えられる。

建物として 6AFF-B 区内で瓦葺礎石建物 SB002 と SB370 の掘込地業と其々に伴う外周溝 SD365・SD366 および SD362・SD369 を検出した。

6AFG-A 区内では SX（SB）375 を検出した。これも礎石建物の掘込地業の可能性が高い。

SB002 は伊勢国府跡の平成 4 年度第 1 次調査で長塚 1 区として調査され、建物跡らしいと報告されていたものである。当時は、礎石建物の地下構造の調査経験に乏しいこともあり、また調査トレンチが運悪く掘込地業の真っ只中に設定されたこともあって、地業を地山まで掘りぬいた後に断面でようやく建物基壇に伴う遺構であることに気づいたようで、残念ながら掘込地業には言及できていない。また、建物外周には石敷遺構が存在すると報告されていて、その性格が不明であったが、今回の調査で溝や土坑底部に現れた基盤層下層の礫層を誤認したものと確認できた。石敷遺構については存在しなかったと訂正しておきたい。

SB002 は南北棟の建物で、地業の規模は桁行 21.8 m（74 尺）、梁行 12.8m（43 尺）、SB370 は梁行 11.5 m（39 尺）である。検出された建物は基壇の地上部分は失われ、当然のことながら礎石は残らず、唯一の手掛かりとなる足場穴も 1 基それらしいピットを検出したのみで、建物規模と柱配置を復元する手掛かりに乏しい。側柱建物であるのか総柱建物であるかも不明である。

これまで北方官衙ブロックで確認された建物には梁行 40 尺前後の基壇は見られず、大形建物と小形建物の中間

に位置する。

北方官衙で唯一礎石が残り基壇の規模と柱配置が判明している SB001 では、側の軒の出は約 2 m（6.5 又は 7 尺）で梁行の柱間は 12+10+10+12 尺と判明している。これを参考とすると、SB002 はそれに比べ基壇規模が小さいので、仮に側の軒の出を 5.5 尺とし柱間が等間であるとすれば梁行 8 尺×4 間（二面廂）、妻は軒の出 6.5 尺だと桁行 12 尺または 10 尺で 2 間×5 または 6 間といった想定が可能であろう。

SB370 は東西棟の建物で、西辺部しか検出できていない。地業の梁行が 11.5 m（39 尺）であるため、軒の出を 5.5 尺とすれば梁行 7 尺等間の 4 間（二面廂）、軒の出 6 尺ならば 9 尺等間の 3 間、または 2 間で片廂の建物の可能性がある。

建物配置について、SB002 は西辺築地 SA371 から約 2 m と、極めて近接して建てられている。また SB002 の北妻と SB370 の南西隅は 2.5 m ほどしか離れておらず、かなり密に建てられていることが注目される。

SX（SB）375 は、建物の地業であるらしいことが言えるのみで規模や棟方向は不明である。南面築地から約 10 m（33 尺）内側を塞ぐように建っていることは確実であろう。東に隣接する南野南区において、第 1・7 次調査の結果、西辺区画施設に近接して南北棟の長舎 SB001 が配置され、南面区画の想定ラインのすぐ内側を塞ぐ形で大形の東西棟建物 SB008 が存在することが確認されている。その在り方はこの長塚南東区と共通するものがある。

長塚南西・長塚南東・南野南の各院内の基本的な建物配置は、いずれも区画の中心軸に東西棟の建物を南北に並列して建て、その外側に南北棟の長舎的な建物を置く「H」または「日」形の配置を取るという基本点では共通している。しかし、各建物の配置・間隔および規模に相違点が多く、また南門の有無も含めて様々で、各院が独自の機能や目的に応じて設計されたことがうかがえる。

ただ、これまでの調査ではなぜか各区画（院）の西半のみが調査の対象となってしまう。官衙遺跡ということに加え、長塚南西区の南門の存在もあって、漠然と中心軸に対して左右対称な建物配置をイメージを抱いてしまっている。しかし、今のところその点は未確認であり、次回調査では区画（院）内の配置を確定するため、東半および北部について調査を進め、長塚南東区の史跡追加指定につなげたいと考えている。

地方官衙において、政庁以外でこのように瓦葺礎石建物が建ち並ぶ例は全国的にみても稀有である。これだけの規模の官衙遺跡であるにも係らず、押印文字瓦以外の墨書土器等の文字資料の出土が皆無なこともあり、北方官衙の院の性格・機能は不明なままである。一案として

示されているのが国司館であるが、生活の場としての建物は一般的には宮レベルでも掘立柱建物であることが多く、例外的であるといえる。また、大国の国府であるとしても一般的な曹司はほとんどを礎石建物とするのは格が高すぎる感があり、ここまで礎石建物にこだわる理由は不明である。

さらに、政庁以外で総地業を持つような礎石建物の例

〔伊勢国府関連参考文献〕

浅尾悟 1993『伊勢国分寺跡（5次）長者屋敷遺跡（1次）』鈴鹿市教育委員会
石田浩司・杉立正徳・林和範 2001『基盤整備促進事業（担い手育成型）国府南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 天王山西遺跡 三宅神社遺跡 梅田遺跡』鈴鹿市教育委員会
宇河雅之 1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
宇河雅之 1997「伊勢国府の方格子割」『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター
小倉整 2006『伊勢国府跡8』鈴鹿市考古博物館
杉立正徳 1997「長者屋敷遺跡（第5次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
杉立正徳 1997「長者屋敷遺跡（第6次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市考古博物館 2002『伊勢国府跡史跡指定ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2007「富士遺跡（第2次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2007『伊勢国府跡9』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2009『伊勢国府跡11』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2010『伊勢国府跡12』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2011『伊勢国府跡13』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2016『平田遺跡』鈴鹿市考古博物館
辻公則 1996「国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～」『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ 鈴鹿市教育委員会
新田剛 1997「三宅神社遺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
新田剛 1994『伊勢国分寺・国府跡―長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』鈴鹿市教育委員会
新田剛ほか 1996『伊勢国分寺・国府跡』3 鈴鹿市教育委員会
新田剛ほか 1997『伊勢国分寺・国府跡』4 鈴鹿市教育委員会
新田剛 1998「長者屋敷遺跡発掘調査概要（9次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』鈴鹿市教育委員会
新田剛 1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2000『伊勢国府跡2』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2001『伊勢国府跡3』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2002「伊勢国府跡」『伊勢国府跡史跡指定記念ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2004「付論-伊勢国府・国分寺系文字瓦」『企画展 文字瓦を考える』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2004「伊勢国府とその周辺の重圏文軒丸瓦考-伊勢国府・鈴鹿関・鈴鹿駅家・河口関を考えるための覚書-」『かにかくに』三星出版
新田剛 2006「伊勢国府跡と大角遺跡における重圏文軒丸瓦」『考古学雑誌』90-3
新田剛 2011「伊勢国府の成立」『古代文化』第63巻第3号 財

自体が希少で、ほとんどが正倉などの倉庫遺構といっても過言ではない。正面に門もないことから、長塚南東・南野南区の礎石建物が総柱の倉あるいは屋で、倉院である可能性も考えてはみるが、斎宮跡の庫寮や近江国府の惣山遺跡のような同規模の建物が整然と並ぶといった特徴はみられない。結局、結論は得られず、今後も調査を進め何らかの文字資料の出土を待ちたいところである。

団法人古代学協会

新田剛 2011『伊勢国府・国分寺跡』同成社

新田剛 2012『伊勢国府跡14』鈴鹿市考古博物館

新田剛 2013『伊勢国府跡15』鈴鹿市考古博物館

新田剛 2014「伊勢国府と関連遺構」『駒澤考古』39

新田剛 2014「東海地方の重圏文系軒瓦」『古代瓦研究6 大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開』奈良文化財研究所
新田剛 2015「東海道 伊勢」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会 吉川弘文館

新田剛 2018「東海地方西部の一本づくり・一枚づくり伊勢国府国分寺の所要瓦を中心として-」『第18回シンポジウム8世紀の瓦づくりⅦ-一本づくり・一枚づくりの展開1-発表要旨』奈良文化財研究所

新田剛 2020「伊勢国府 国府と方格子割」『季刊考古学』152 雄山閣

新田剛 2020「伊勢国府跡における平瓦一枚づくりの製作痕」『生産の考古学Ⅲ』駒澤大学考古学研究室

林和範 2006「平田遺跡（5次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第7号 鈴鹿市考古博物館

藤岡謙二郎・西村睦男 1957「歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群-軍団陸の問題と附近の開発をめぐって-」『史迹と美術』第279号

藤原秀樹 1997「三宅神社遺跡（第2次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会

藤原秀樹ほか 1995『伊勢国分寺・国府跡2』鈴鹿市教育委員会

藤原秀樹 2014『伊勢国府跡16』鈴鹿市考古博物館

藤原秀樹 2015『伊勢国府跡17』鈴鹿市考古博物館

藤原秀樹 2016『伊勢国府跡18』鈴鹿市考古博物館

藤原秀樹 2017『伊勢国府跡19』鈴鹿市

藤原秀樹 2018『伊勢国府跡20』鈴鹿市

藤原秀樹 2019『伊勢国府跡21』鈴鹿市

藤原秀樹 2020『伊勢国府跡22』鈴鹿市

水野福松 1907『高津瀬村誌』

水橋公恵 2005『伊勢国府跡6』鈴鹿市考古博物館

水橋公恵 2005『伊勢国府跡7』鈴鹿市考古博物館

村山邦彦 1992「鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』128号 古代学研究会

吉田隆史 2009「富士遺跡（第3次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第11号 鈴鹿市考古博物館

吉田真由美 2002『伊勢国府跡4』鈴鹿市教育委員会

吉田真由美 2003『伊勢国府跡5』鈴鹿市教育委員会

吉田真由美 2004「伊勢国府（17次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第5号 鈴鹿市考古博物館

吉田真由美 2017『特別展 道でつながる古代の役所』鈴鹿市考古博物館

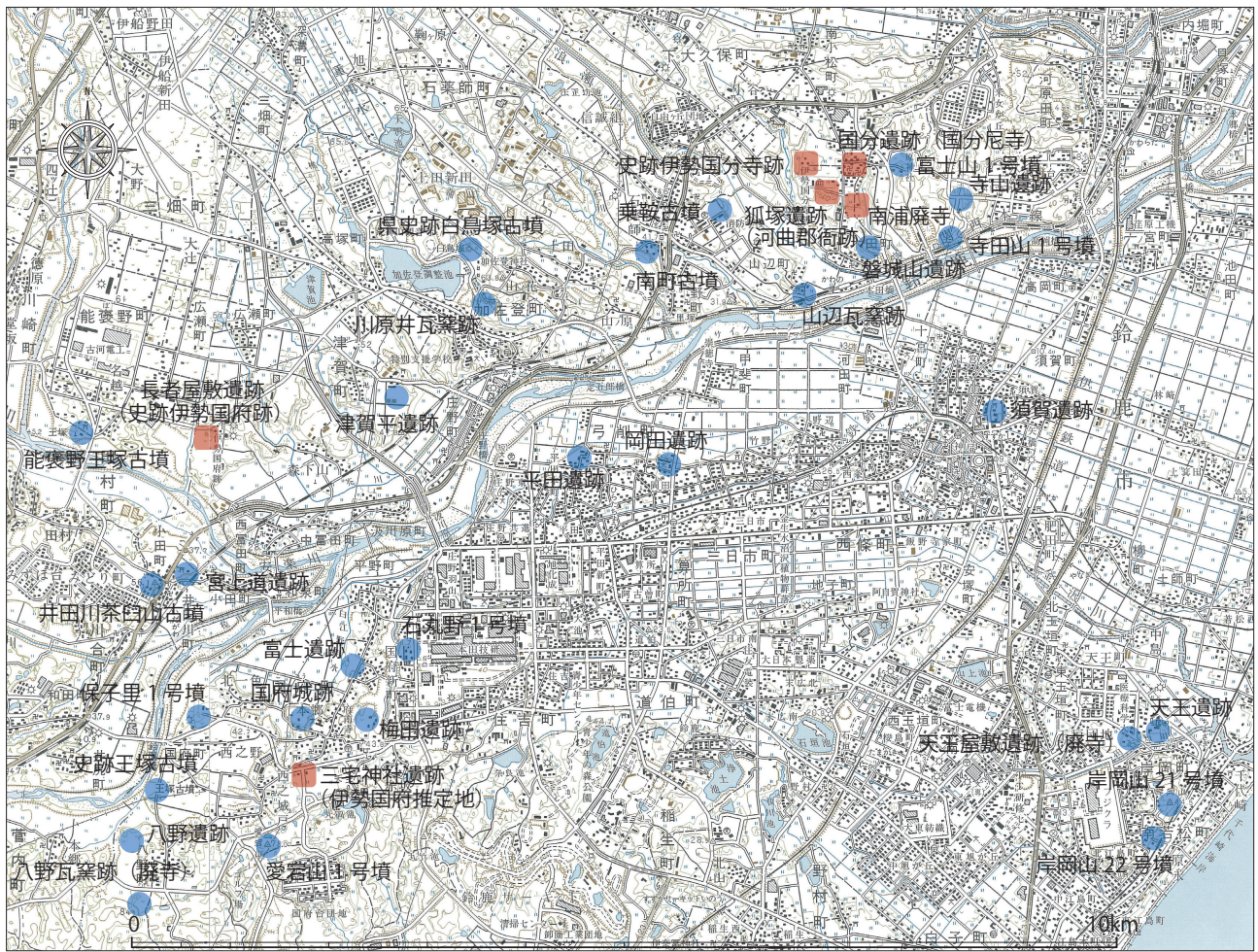


Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:75,000)

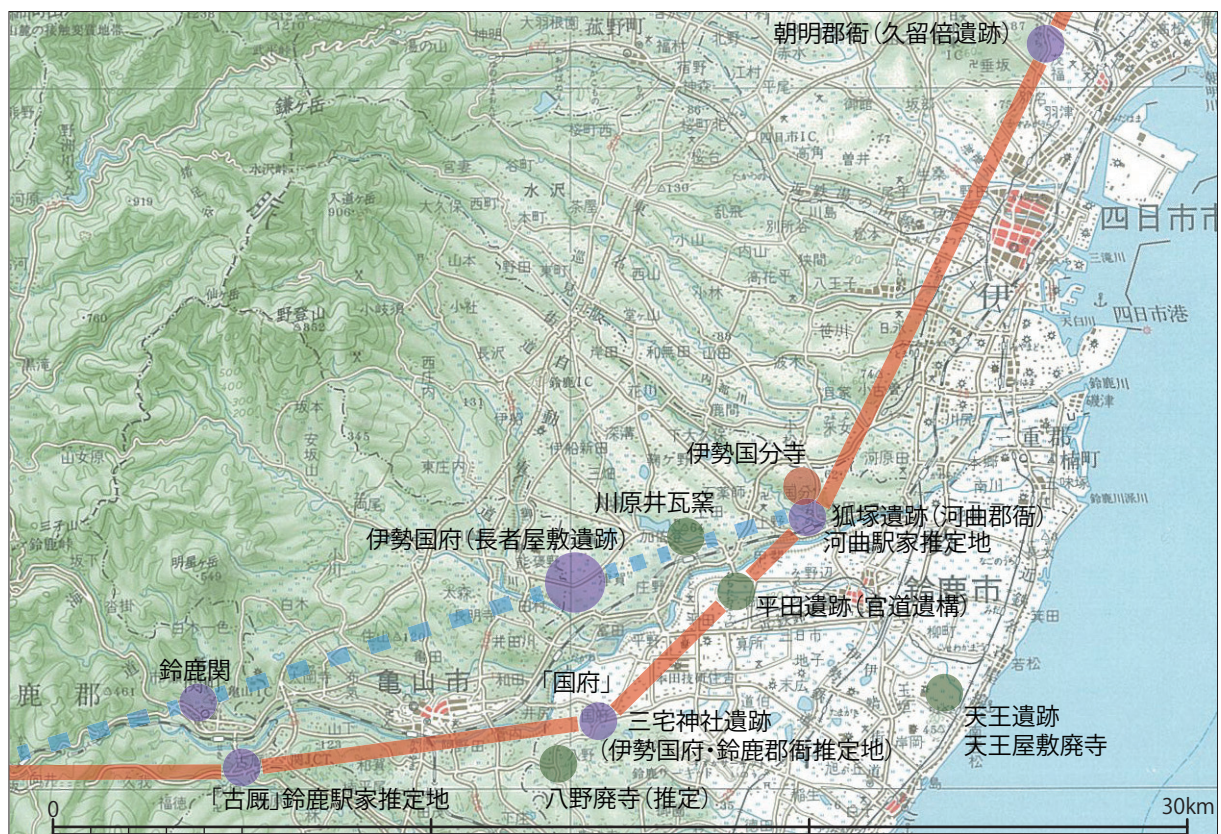


Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な寺院・官衙関連遺跡 (1:200,000)

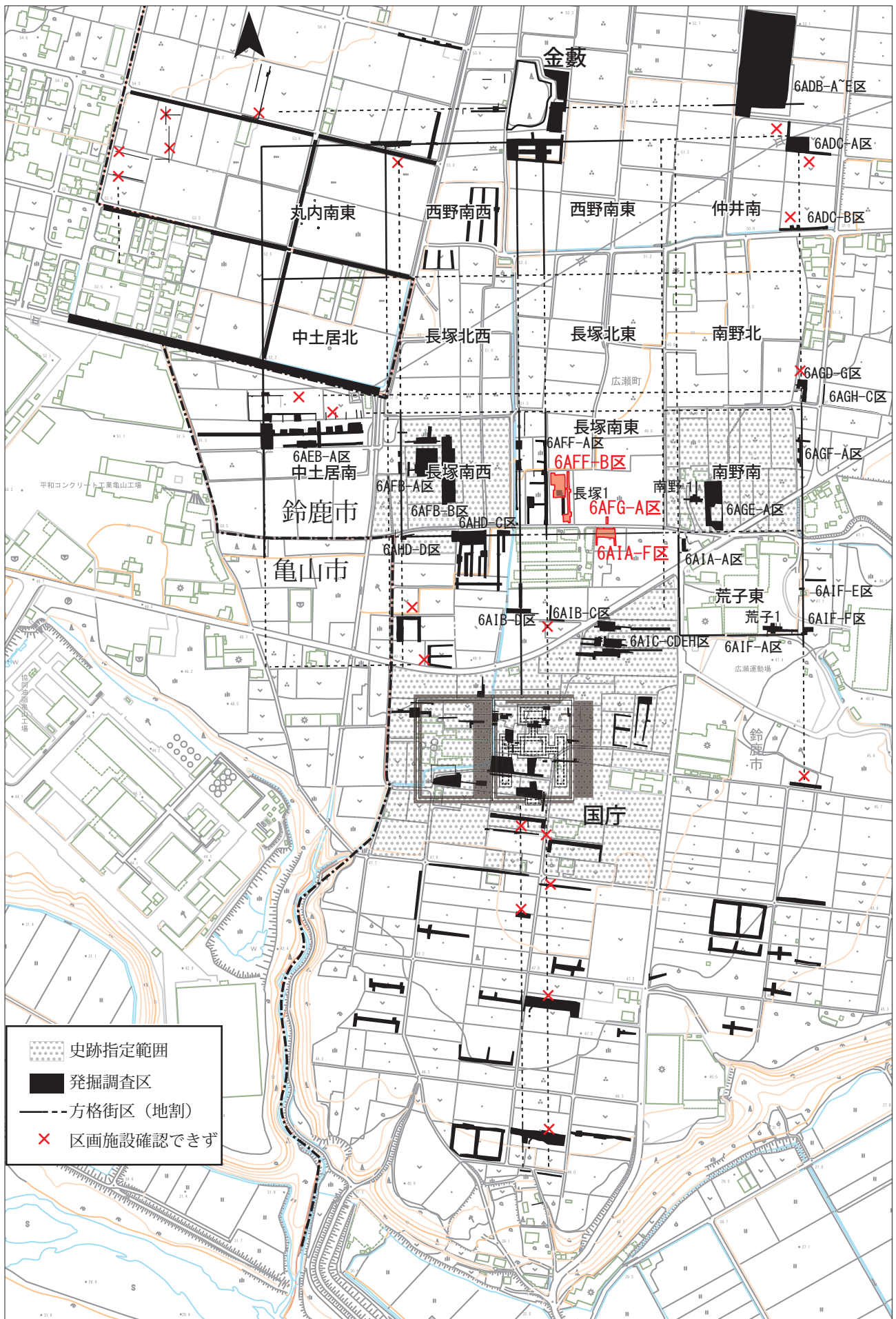


Fig.3 調査区位置図 (1:5,000)

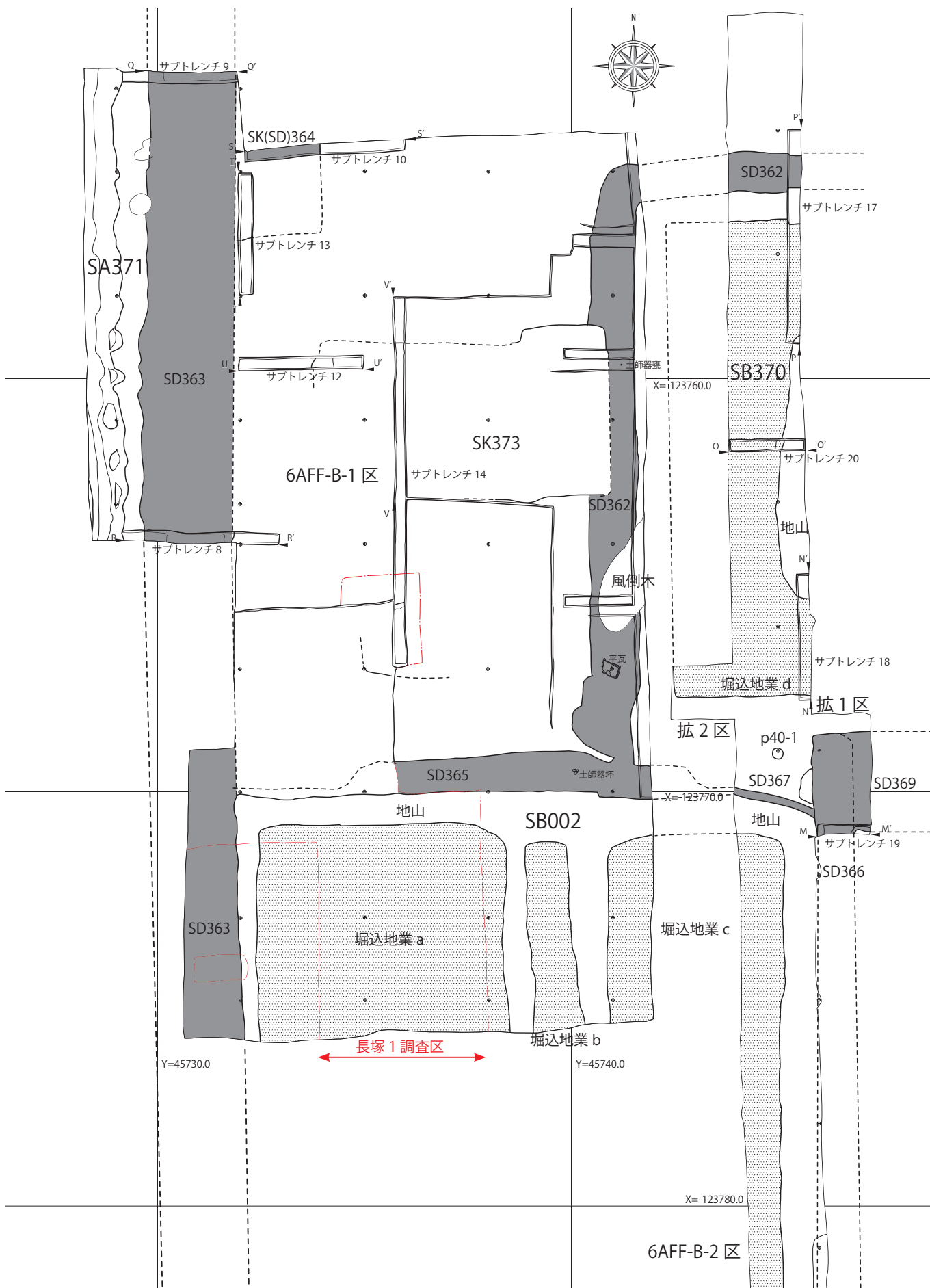


Fig.4 6AFF-B-1 区・6AFF-B-2 区北半遺構配置図 (1/125)

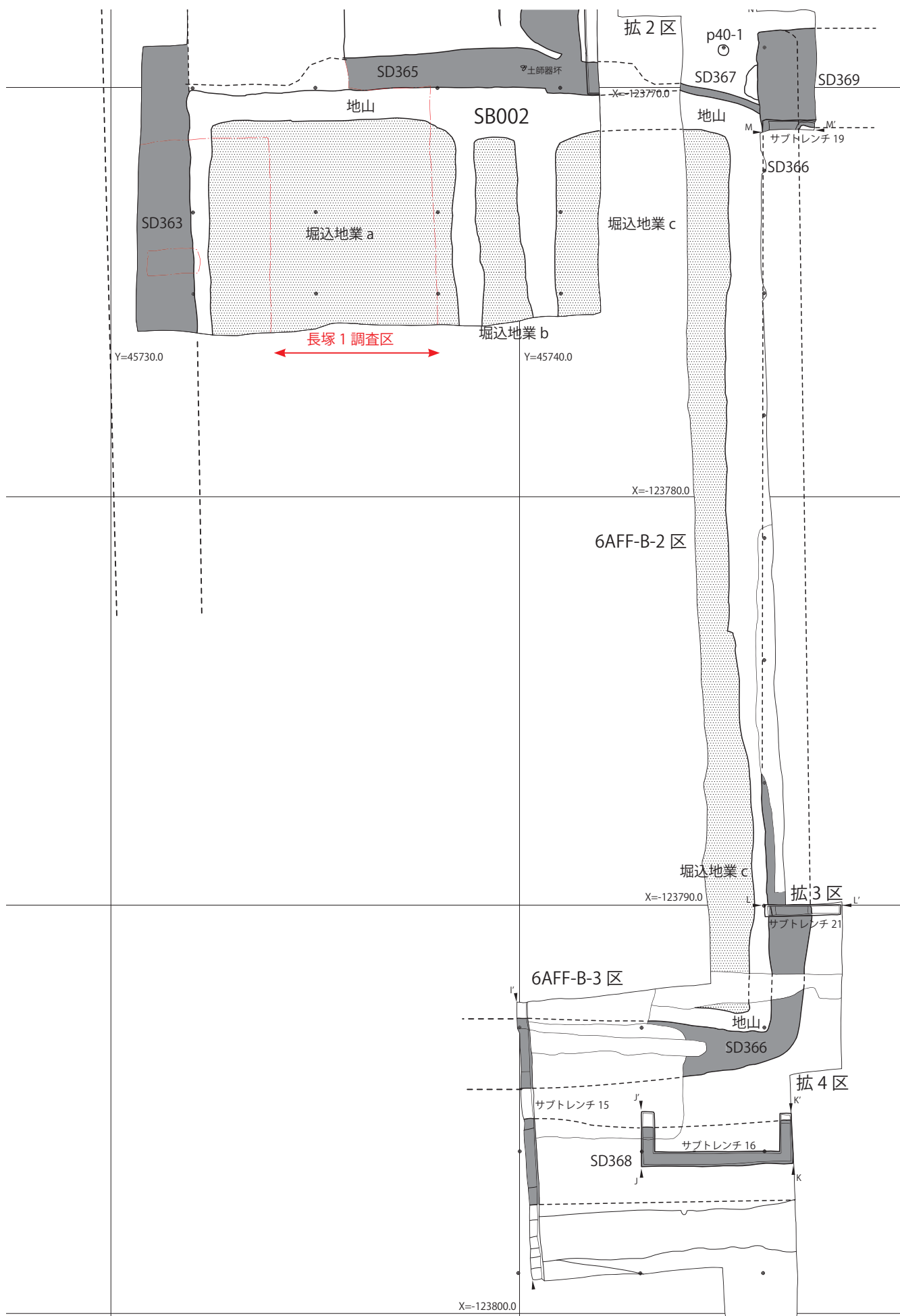


Fig.5 6AFF-B-2 区南半・6AFF-B-3 区遺構配置図 (1/125)

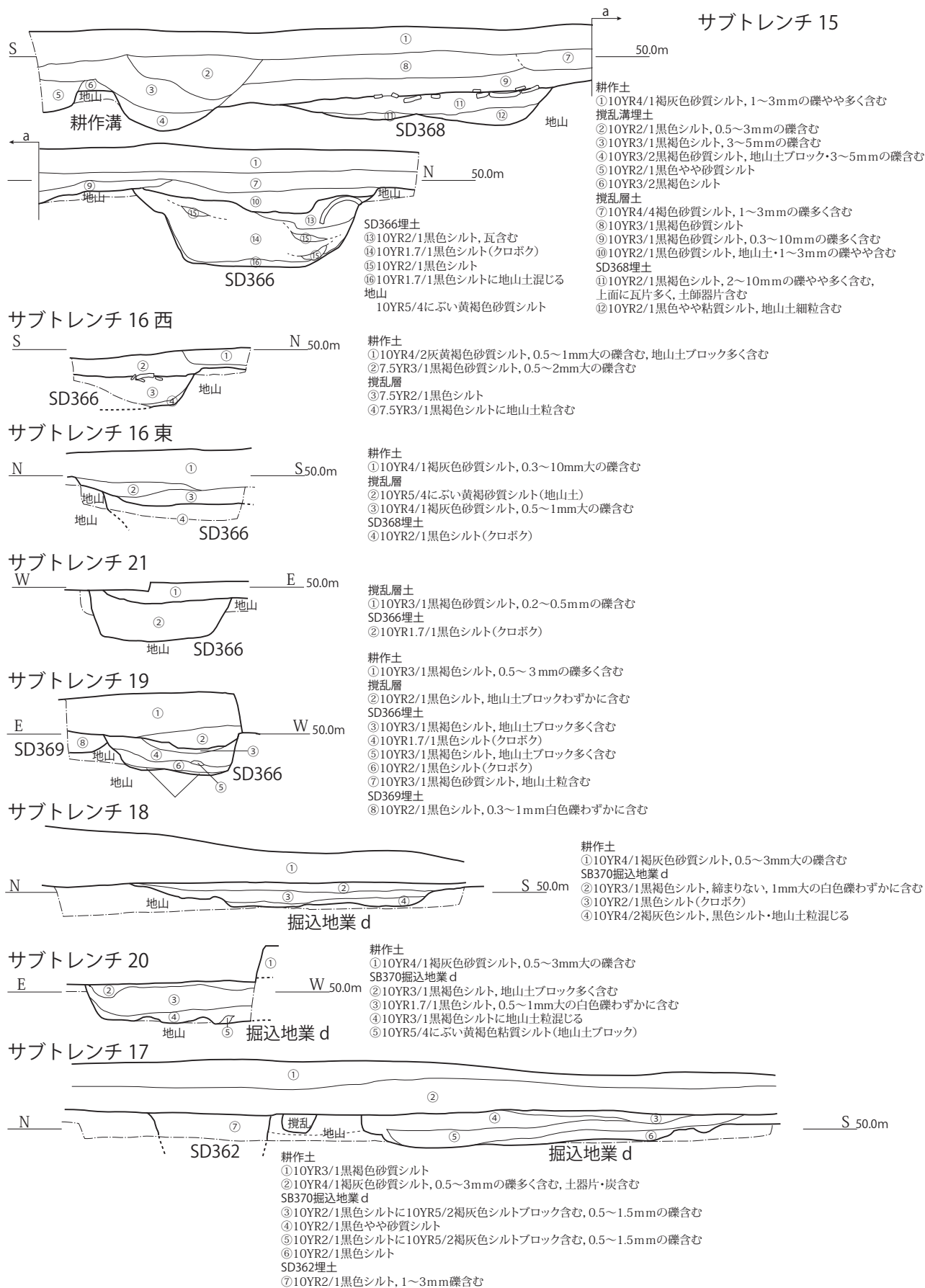
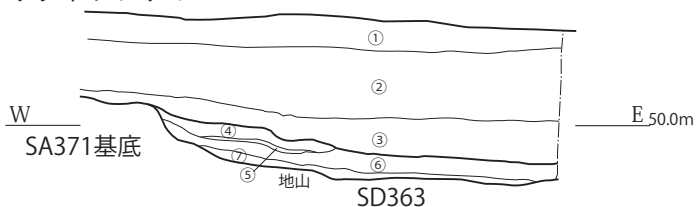


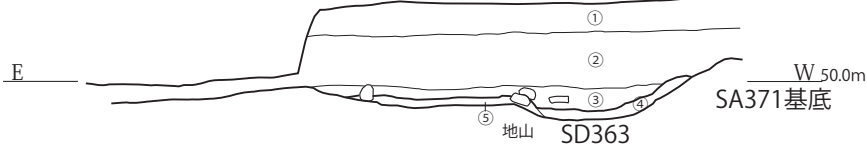
Fig.6 6AFF-B-2 区・6AFF-B-3 区サブトレンチ断面図 (1/40)

サブトレンチ 9



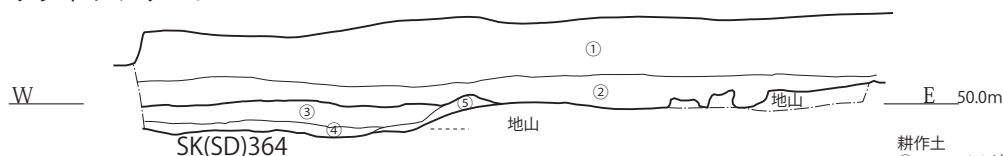
- 耕作土
①10YR4/1 褐灰色砂質シルト
②10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト, 1~3mm大の礫含む
攪乱層土
③10YR3/1 黒褐色やや砂質シルト, 1~3mm大の礫含む
SD363埋土
④10YR3/2 黒褐色砂質シルト, 地山土ブロック含む
⑤10YR5/4にぶい黄褐色地山土
⑥10YR1.7/1 黒色シルト(クロボク)
⑦10YR3/1 黒褐色砂質シルト, 地山土層状に入る

サブトレンチ 8



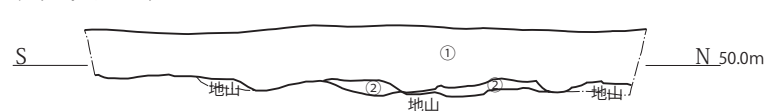
- 耕作土
①10YR4/1 褐灰色砂質シルト
攪乱層土
②10YR4/1 黒褐色砂質シルト, 0.5~3mmの礫含む
③10YR4/1 褐灰色砂質シルト, 0.3~1mmの礫含む
SD363埋土
④10YR2/1 黒色シルトに10YR4/1 褐灰色砂質シルト層状
⑤10YR2/1 黒色シルトに拳大礫含む

サブトレンチ 10



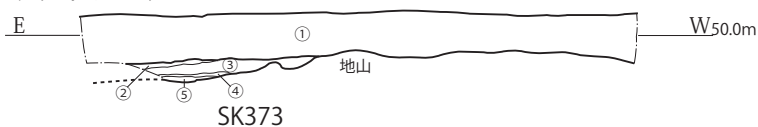
- 耕作土
①10YR4/2 灰黄褐色シルト, 3~20mmの礫多く含む
攪乱層土
②10YR3/1 黒褐色砂質シルト, 0.3~10mmの礫やや多く
SK364埋土
③10YR1.7/1 黒色シルト(クロボク)
④10YR2/1 黒色シルト, わずかに地山土粒含む
⑤10YR1.7/1 黒色シルト, 地山土ブロック含む

サブトレンチ 13



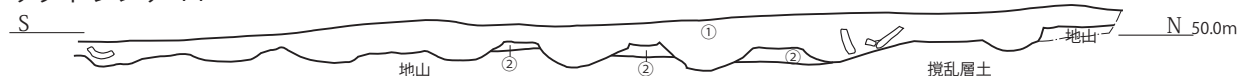
- 攪乱層土
①10YR3/1 黒褐色砂質シルト, 1~3mmの礫多く含む
SK364埋土
②10YR2/1 黒色シルト, 地山土ブロック含む

サブトレンチ 12



- 攪乱層土
①10YR3/1 黒褐色砂質シルト, 1~3mmの礫多く含む
SK埋土
②10YR5/4にぶい黄褐色シルト(地山土)
③10YR2/1 黒色シルト
④10YR5/4にぶい黄褐色シルト(地山土)
⑤10YR2/1 黒色シルトに地山土ブロック含む

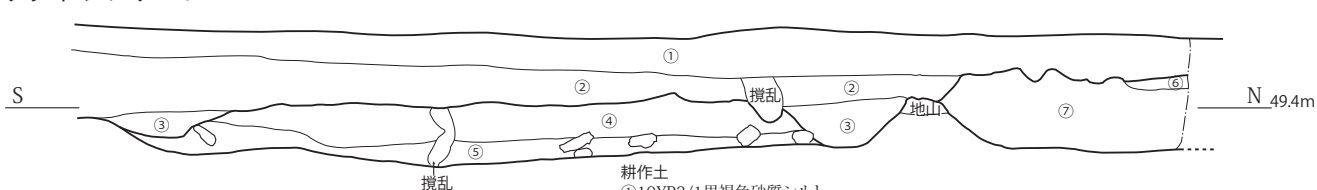
サブトレンチ 14



- 攪乱層土
①10YR3/1 黒褐色砂質シルト, 1~3mmの礫多く含む
SK373埋土
②10YR2/1 黒色シルト, 地山土ブロック含む

Fig.7 6AFF-B-1 区サブトレンチ断面図 (1/40)

サブトレンチ 26



- 耕作土
①10YR3/1 黒褐色砂質シルト
②10YR3/1 黒褐色シルト, 3~5mmの礫やや多く含む
攪乱層土
③10YR3/1 黒褐色シルト
SD374埋土
④10YR2/1 黒色砂質シルト, 2~3mmの礫含む
⑤10YR3/2 黒褐色砂質シルト, こぶし大の礫含む
SB375掘込地業?
⑥10YR2/1 黒色シルト, 地山土ブロック含む
⑦N1.5/黒色シルト, 1~5mm礫・地山土ブロックわずかに含む

Fig.8 6AFG-A 区サブトレンチ断面図 (1/40)

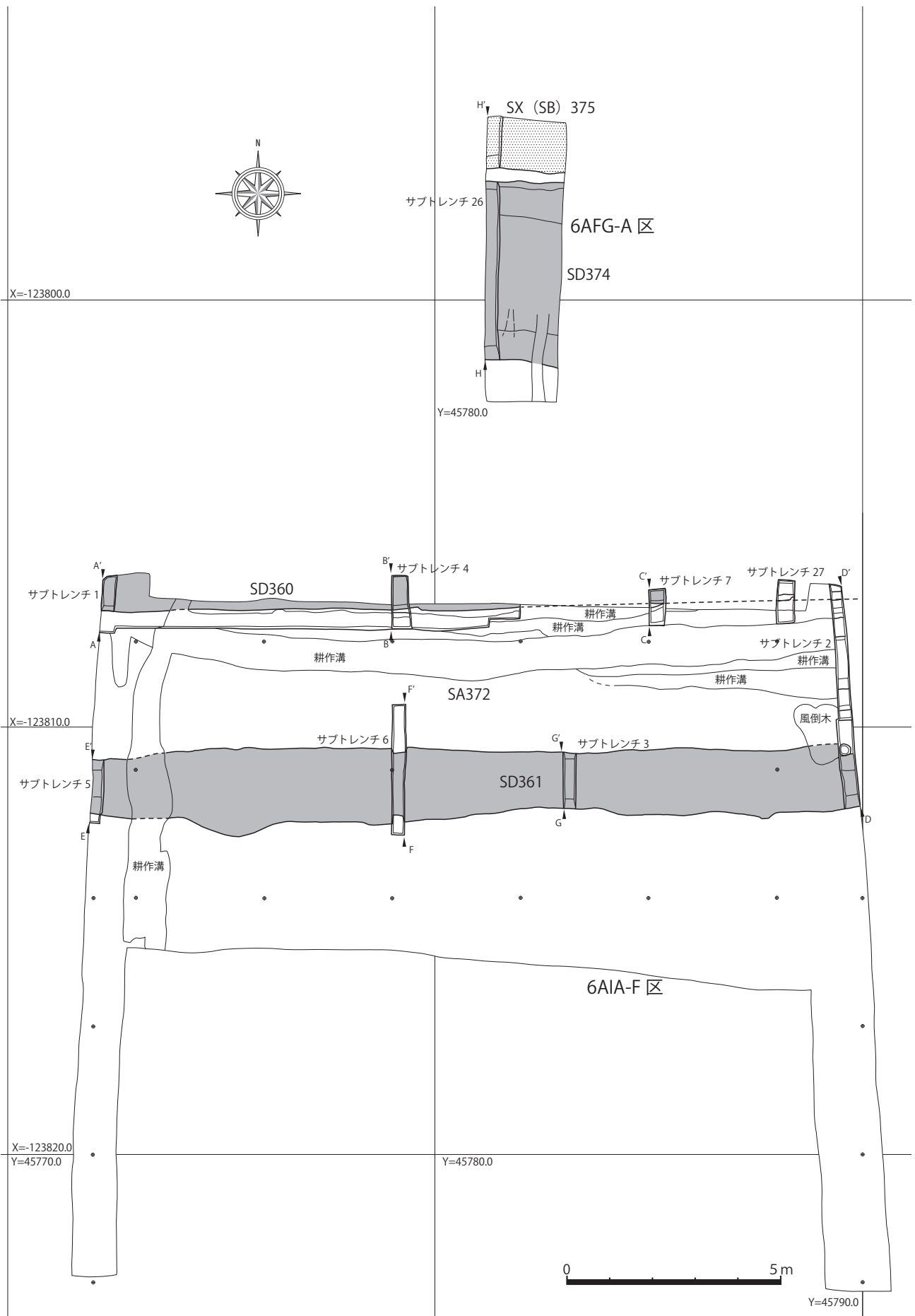
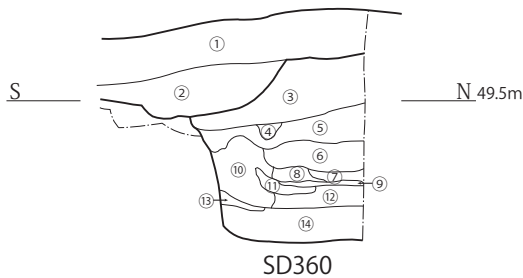


Fig.9 6AIA-F 区・6AFG-A 区遺構配置図 (1/125)

サブトレンチ 1



現耕作土

①10YR2/2黒褐色シルト2~5mm大の礫多く

攪乱溝埋土

②7.5YR2/1黒色シルト1~5mm大の砂礫・地山土ブロック含む

SD360埋土

③10YR2/2黒褐色砂質シルト, 地山土粒含む

④10YR2/2黒褐色シルトに5~10mm大の地山土ブロック含む

⑤10YR3/1黒褐色やや砂質シルトに5~10mm大の地山土ブロック含む

⑥7.5YR1.7/1黒色シルト

⑦7.5YR1.7/1黒色シルト

⑧10YR2/2黒褐色シルトに地山土ブロックやや含む

⑨10YR8/2灰黄褐色シルト(地山土)

⑩10YR2/2黒褐色シルトに5~10mm大の地山土ブロック極めて多く含む

⑪7.5YR1.7/1黒色シルト

⑫10YR2/2黒褐色シルトに5~10mm大の地山土ブロックやや含む, 上面で土師器出土

⑬10YR2/2黒褐色シルトに地山土ブロックやや含む

⑭7.5YR1.7/1黒色シルト, 瓦含む

地山

10YR5/4にぶい黄褐色シルト, 0.5~1cm大白色礫含む

耕作土

①10YR2/2黒褐色シルト2~5mm大の礫多く含む

攪乱溝埋土

②10YR2/2黒褐色シルト2~3mm大の地山土粒含む

③10YR2/1黒色シルト(やや砂質)

④10YR3/2黒褐色シルトに地山土細粒含む

SD360埋土

⑤10YR2/1黒色シルト(密)3~10mm大の地山土ブロック含む

⑥10YR4/2灰黄褐色シルト

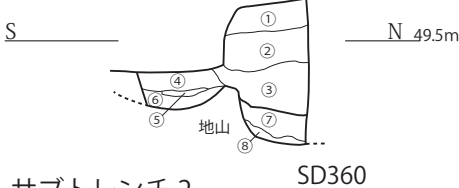
⑦10YR1.7/1黒色シルト下部に30mm大の地山土ブロック含む

地山

サブトレンチ 4



サブトレンチ 7



耕作土

①10YR2/2黒褐色シルト2~5mm大の礫多く含む

攪乱溝埋土

②10YR4/1褐灰色砂質シルト3~10mm大の礫含む

③10YR3/1黒褐色シルトに地山土細粒含む

④10YR3/1黒褐色シルトに地山土細粒多く含む

⑤10YR1.7/1黒色粘質シルト

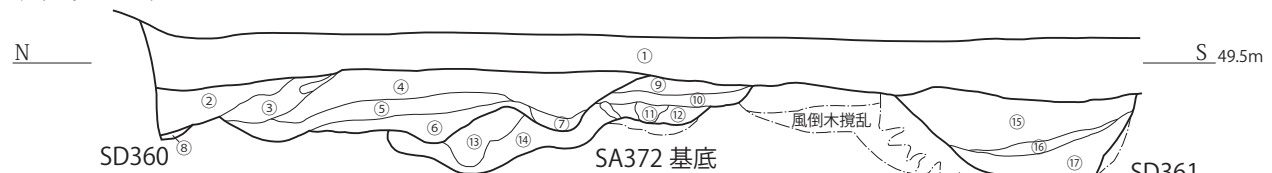
⑥10YR3/1黒褐色シルトに地山土細粒多く含む

SD360埋土

⑦10YR1.7/1黒色シルト(クロボク)

⑧10YR1.7/1黒色シルトに地山土細粒混じる

サブトレンチ 2



耕作土

①10YR3/1黒褐色シルト, 0.5~30mmの礫含む

攪乱溝埋土

②10YR3/2黒褐色シルト, 黒色シルト・地山土ブロック含む

③10YR5/6黄色砂質シルトに10YR3/1黒褐色シルト混じる, 3~10mm礫混じる

④10YR3/3黒褐色砂質シルト, 地山土ブロックわずかに含む

⑤10YR3/3暗褐色やや砂質シルト, 5~10mm大の黒色シルトブロック混じる

⑥10YR2/1黒色シルトと10YR5/6黄褐色シルトが薄い層状に混じる

⑦10YR6/6明黄褐色シルトに10YR4/4にぶい黄褐色シルト薄い層状に混じる

SD360埋土

⑧10YR2/1黒色シルト

掘込地業埋土か?

⑨10YR3/2黒褐色シルト, 黒色シルト・地山土ブロック多く含む

⑩10YR3/2黒褐色砂質シルト

⑪10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(攪乱)

⑫10YR3/2黒褐色シルト

⑬10YR3/1黒褐色シルト, 10~30mm地山土ブロック多く含む

⑭10YR4/2灰黄褐色砂質シルト, 地山土粒やや多い

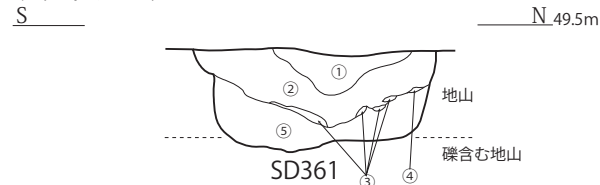
SD361埋土

⑮10YR2/1黒色シルト(クロボク)

⑯10YR2/1黒色シルト, わずかに地山土粒含む

⑰10YR2/1黒色シルト

サブトレンチ 3



SD361埋土

①7.5YR2/1黒色シルト締まりない, 5mm大の礫・瓦片含む

②7.5YR1.7/1黒色シルト, 下部に地山土細粒含む

③2.5Y7/4浅黄色シルト(地山土)

④2.5Y7/4浅黄色シルト, 橙色焼土粒含む

⑤7.5YR1.7/1黒色シルト(クロボク)

SD361埋土

①7.5YR2/1黒色シルト

掘込地業埋土か?

②10YR3/2黒褐色シルトに, 10YR5/6黄褐色シルト粒状に混じる

③10YR4/2灰黄褐色シルトに7.5YR2/1黒色シルト混じる

地山

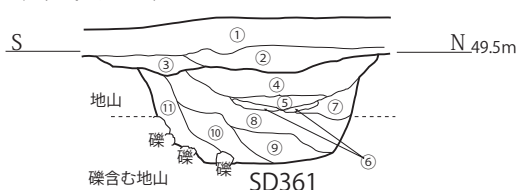
④10YR3/2黒褐色シルト

⑤10YR5/6黄褐色やや粘質シルト

サブトレンチ 6



サブトレンチ 5



耕作土

①10YR4/2黒褐色土, 2~5mm大の礫多く含む

攪乱溝埋土

②10YR1.7/1黒色シルト, 締まりない, 3~5mm大の礫含む

③10YR1.7/1黒色シルト, 締まりない, 地山土ブロックわずかに含む

SD361埋土

④7.5YR1.7/1黒色シルト, 3mm大の礫含む

⑤7.5YR1.7/1黒色シルト

⑥10YR5/4にぶい黄褐色シルト(地山土)

⑦10YR1.7/1黒色シルト, 地山土ブロック多く含む

⑧7.5YR1.7/1黒色シルト

⑨10YR1.7/1黒色シルト, 地山土ブロック多く含む

⑩7.5YR2/1黒褐色シルト

⑪10YR1.7/1黒色シルト, 地山土ブロック多く含む

Fig.10 6AIA-F 区サブトレンチ断面図 (1/40)

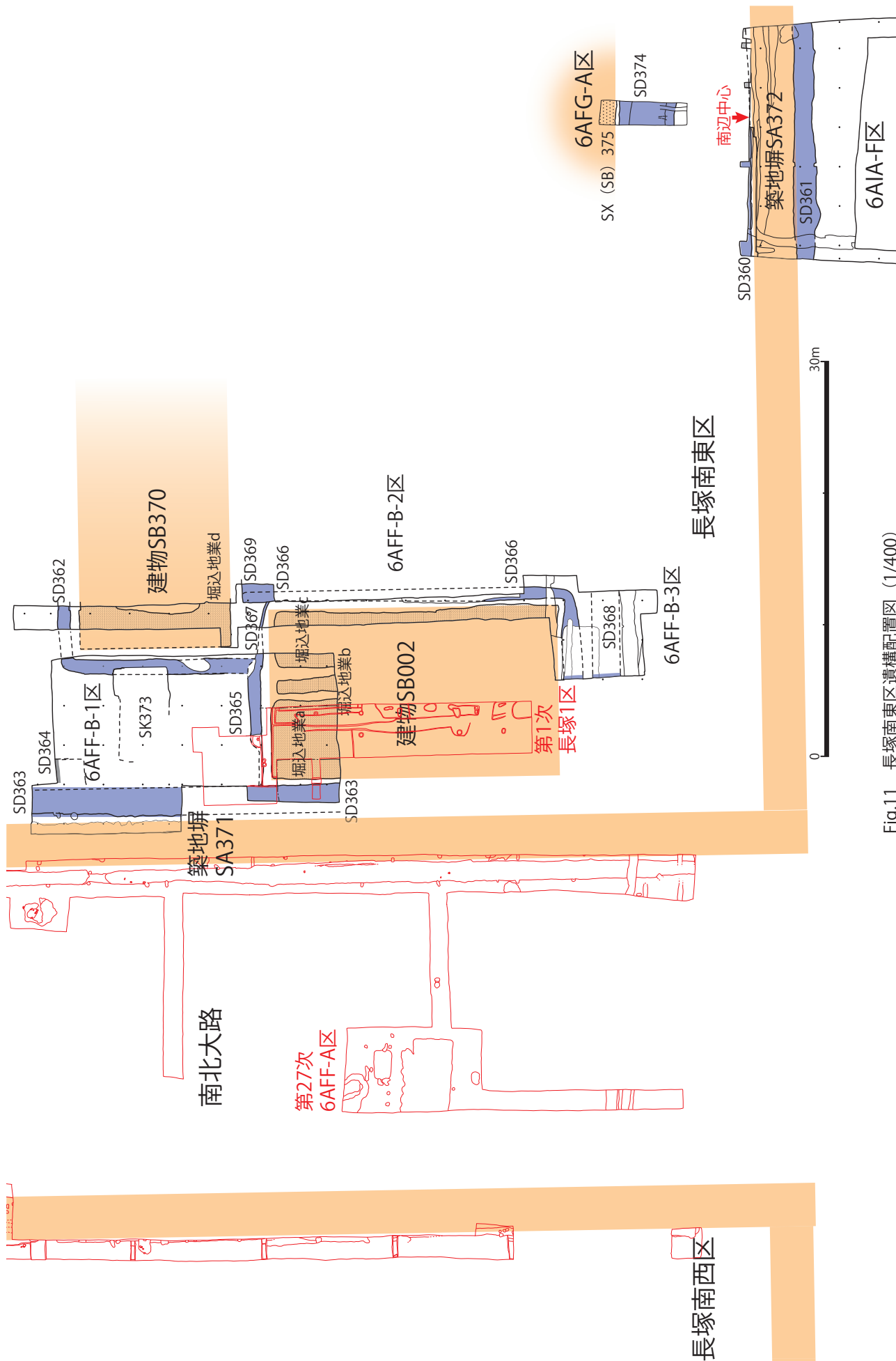


Fig.11 長塚南東区遺構配置図 (1/400)

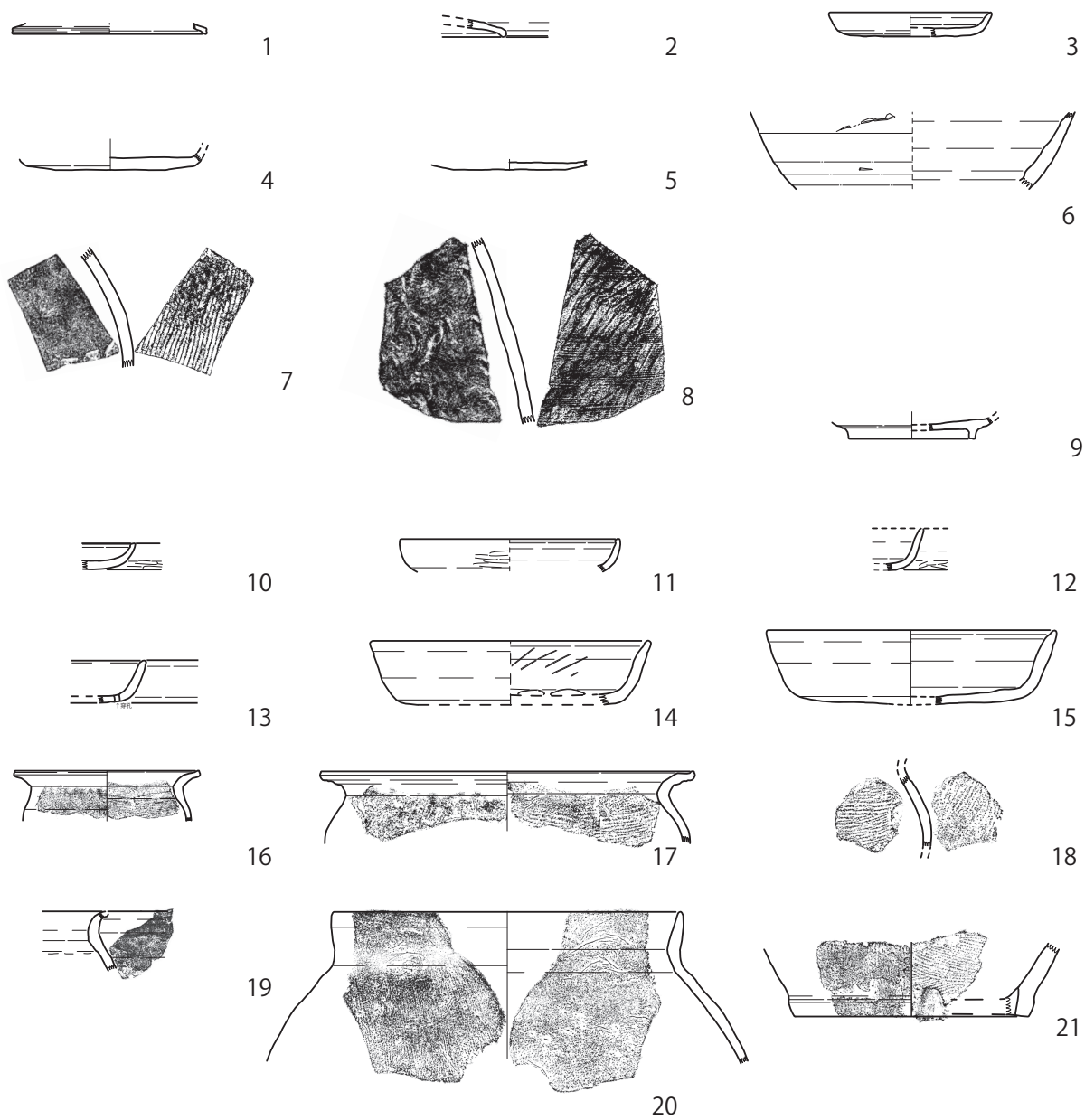


Fig.12 土器実測図 (1/4)

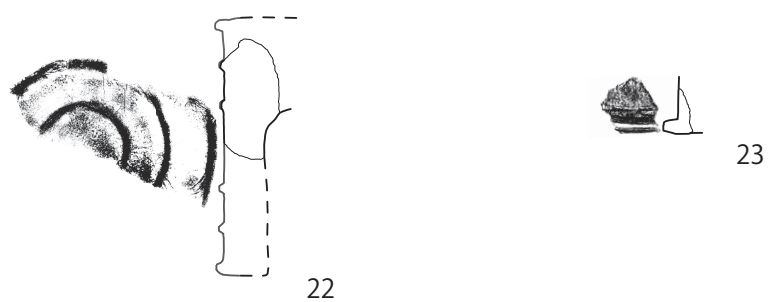


Fig.13 軒丸瓦実測図 (1/4)

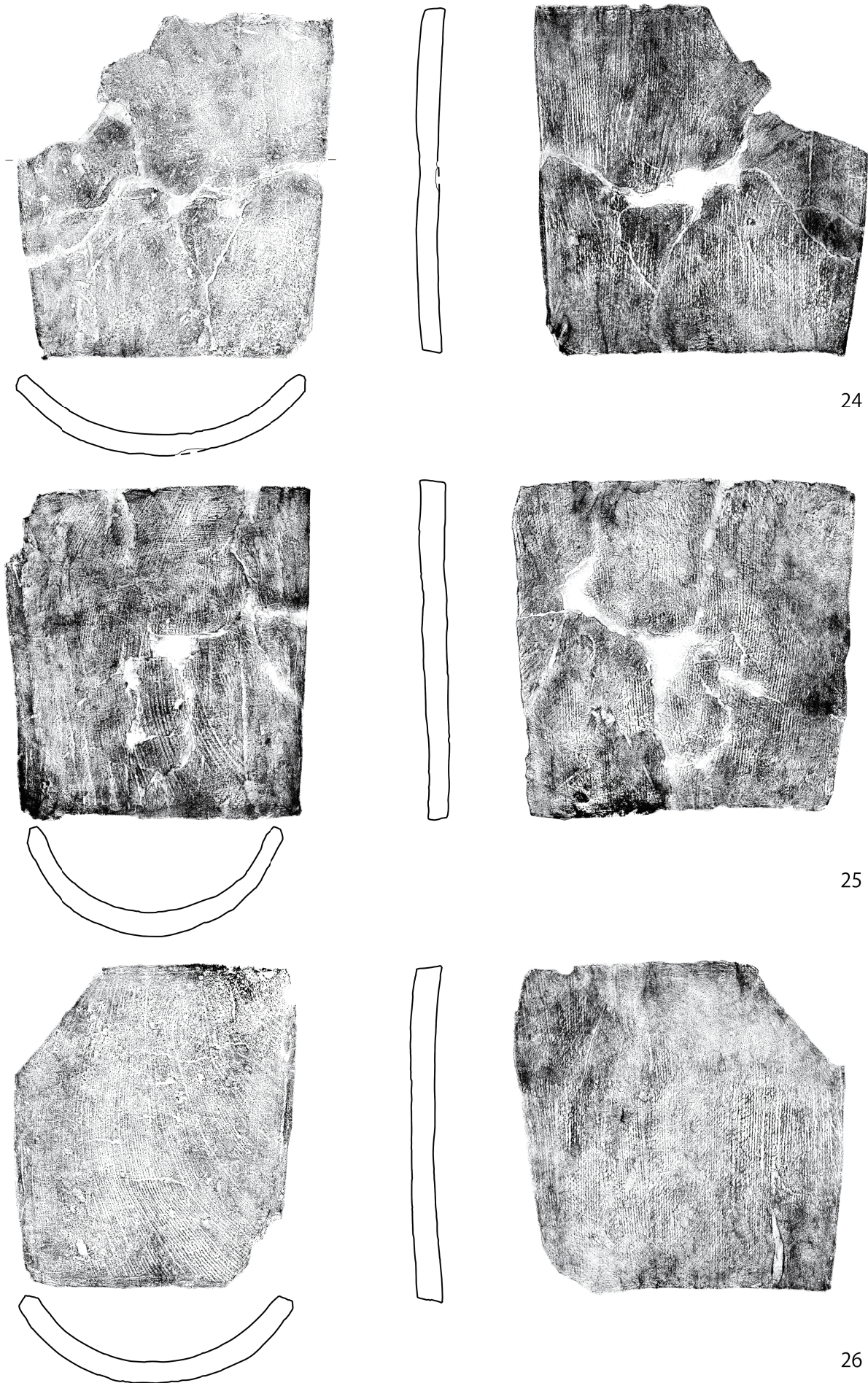
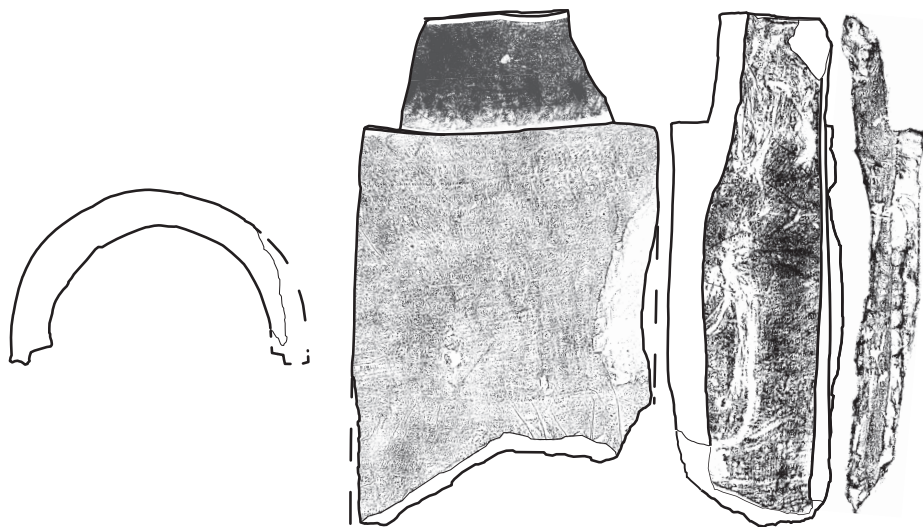


Fig.14 平瓦実測図 (1/6)

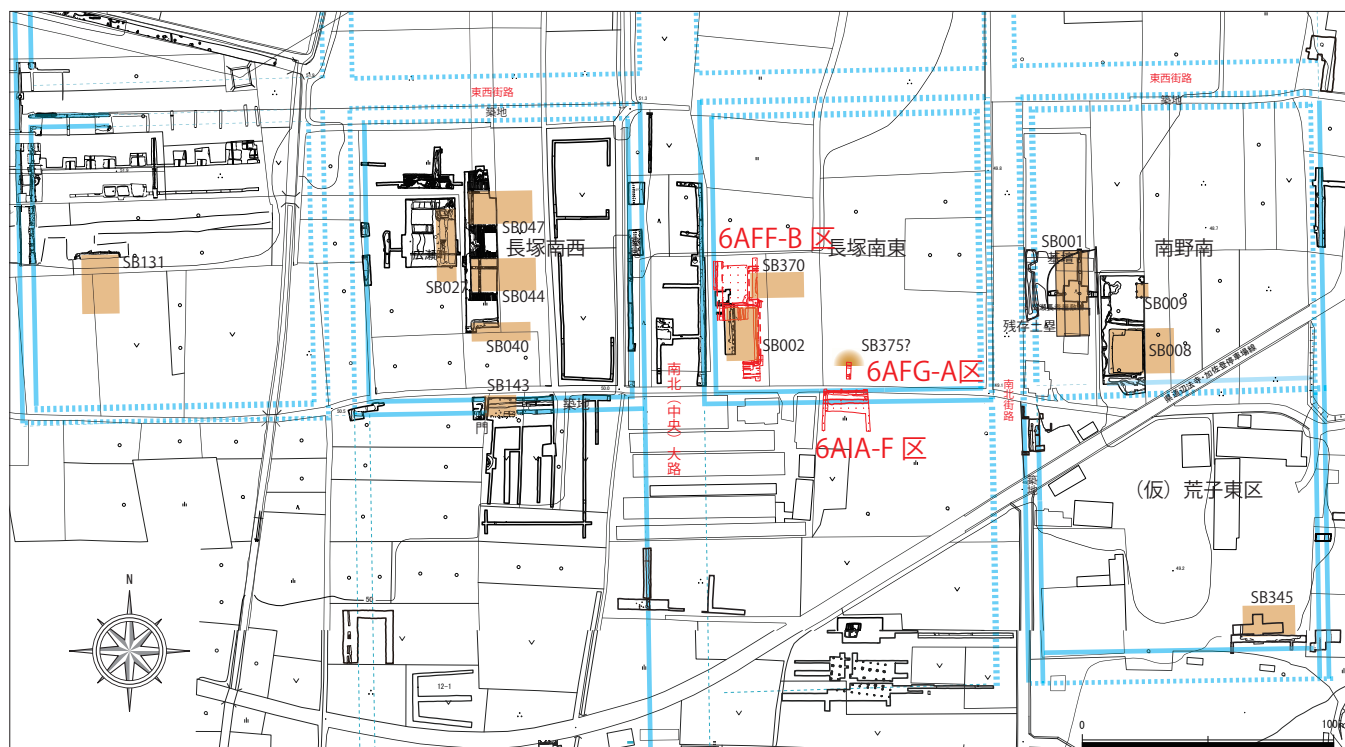


27

Fig.15 丸瓦実測図 (1/6)

Tab.2 北方官衙（方格街区）で確認された建物一覧

地区	建物	棟方向	基壇（地業）規模		外周溝	掘込地業	足場穴	建物規模想定・その他
			桁行	梁行				
南野南	SB001	南北	(36.5)	16.9	?	○?	?	(8) × 2 間, 二面廂, 礎石残る
	SB008	東西	13>	18.0	○	○	-	5 × 2 間, 四面廂?
	(SB009)	東西	-	-	-	-	-	掘立柱建物 - × 2 間
長塚南東	SB002	南北	21.9	12.9	○	○	-	6 × 2or5 × 2 間, 二面廂
	SB370	東西	-	11.5	○	○	-	- × 2 間, 二面廂?
	SB375 ?	東西?	-	-	○	○	-	- × - 間
長塚南西	SB027	南北	19>	9.1	○	○	○	(10) × 2 間, 倒壊瓦屋根
	SB040	東西	(19)	(8.1)	○	○	○	5 × 2 間
	SB044	東西	(19)	15	-	○	○	5 × 2 間, 二面廂
	SB047	東西	(19)	14.9	-	○	○	5 × 2 間, 二面廂
	SB143	東西	12	(8.5)	○	-	-	八脚門, 規模は外周溝から
仲土居南	SB131	南北?	-	15	○	-	-	- × 2 間?, 規模は外周溝から
荒子東	SB345	東西	19.5	(8.2)	○	○	-	5 × 2 間?



青実線：確認されている溝 青点線：想定される溝 青点線細：確認できなかった溝

Fig.16 北方官衙（方格街区）で確認された建物 (1:6,000)



調査地全景（南から） 中央奥に金藪



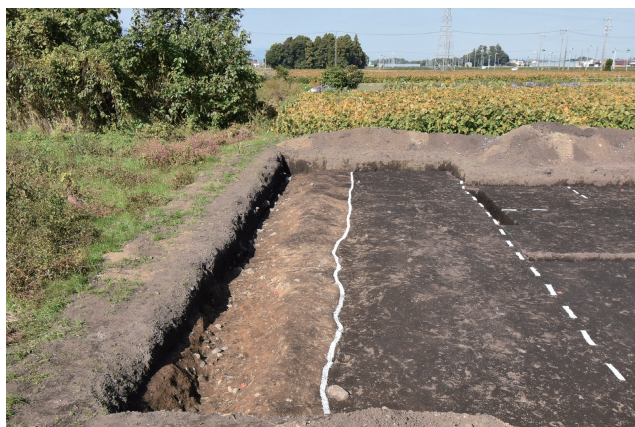
6AFF-B 区全景（右が北）



6AIA-F・6AFG-A 区全景（上が北）



6AFF-B-1 区全景（南から）



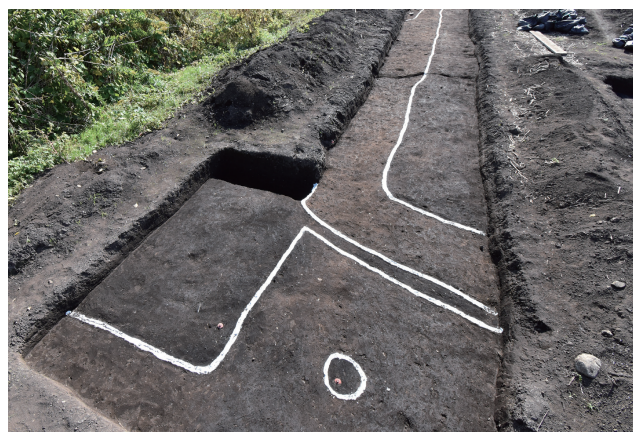
SA371・SD363 (南から)



SB002 外周溝と重複する SD363 (南から)



SB002 北西隅：掘込地業 a-c・SD363・SD365 (北西から)



SB002 北東隅：掘込地業 c・SD366・SD367 (北から)



SB002 南東隅：掘込地業 e・SD366 (南から)



SB002 南東隅：掘込地業 e・SD366 (北から)



SB002 掘込地業 a-c・SD365 (南から)



SB002 掘込地業 a-c・SD363・SD365 (西から)